概念体の構造（6）

── 経済哲学のための構想 ──

浦　上　博　逵

私たちの19世紀を特徴づけるのは，科学の勝利ではなく，科学に対する科学的方法の勝利である。
ニーチェ『権力への意志』より[1]

科学者は，外部世界の実在の姿を漸次あらわにする研究方法を案出したと思われるだけでなく，科学的知識が，社会的ないし個人的影響による歪曲から例外的に自由となっているような，適切な形式の社会的組織を進化せしめたとも思われる……。　マルケイ『科学と知識社会学』より[2]

目　次

第Ⅰ章　予備的考察
　第1節　認識の「性質」問題
　第2節　概念体の構造
　　1.　概念体の三層構造
　　2.　相互作用（以上，第18号）
第Ⅱ章　三つの概念世界
　第1節　意義の世界
　　1.「意義」について
　　2.　形而上概念とは（以上，第19号）
　　3.　形而上概念の要請
　　4.　形而上概念の役割
　　5.　共同体紐帯概念としての形而上概念（以上，第20号）
　　6.　形而上概念の形成（以上，第21号）
　　7.　ヘゲモニー的形而上概念の衰退（以上，第22号）
　第2節　論理の世界
　　1.「論理」について
　　2.　論理概念とは
　　3.　論理概念の要請
　　4.　論理概念の役割（以上，本号）
　第3節　経験の世界
第Ⅲ章　三つの概念世界の相互作用
　第1節　意義の世界から
　第2節　論理の世界から
　第3節　経験の世界から

第2節　論理の世界

1.「論理」について

【論理は伝達形式の一部である】 論理には，思考の論理・発見の論理・発展の論理・事物の運

動の論理・伝達の論理と多種多様あるが，概念体の論理の世界は，伝達形式としての論理である[3]。それゆえその論理は，通常，「形式論理学」とよばれている論理に限定される。形式論理以外の論理には，神秘主義的な様相が多少に拘わらず含まれている。概念体の構造を形成する形式論理[4]は，概念による表現を用いた伝達方式の手段である。そして「伝達」とは，自己の内部の認識における整理化[5]と思想の表現を含んでいる[6]。

【伝達手段としての論理は公共性が要求される】 言語記号の分析が明らかにしたことは，表現作用としての伝達における伝達内容と言語記号が腑分けされ，言語は，伝達内容（電波を例に引くと，音声）を乗せる伝達装置（電波）としての独自の形式をもっていることが発見されたことである。概念体に現れる論理は伝達としての論理形式であり，電波と類似している。電波は，公共的な形式を擁している。周波数が同調すればどのような人であれ受信可能である。これは，電波が基本的には不特定多数に受信されることを想定しており，さらに電波そのものが無内容であるためである。音声はその電波に乗せられて送られる。その音声を受信するか拒否するかは，電波によって決定されることではなく音波を選択する受信者が決定する。形式論理もこのようにすべての人に届くという公共性を有しており，しかも無内容であることにその第一義的な特徴がある。

【形式論理は認識主体に属する論理である】 形式論理の特性が「形式」であることからしても形式論理は認識主体の伝達に関する論理である。実在の世界に形式論理が存在すると想定することは，論理的対象を想定するかあるいは数学的プラトニズムの立場を採用することになるが，そのような立場は存在論を論理の世界に持ち込むことになる。それを拒否する立場からすれば，形式論理に限らず論理といわれるすべての論理は認識主体の創出したものであり実在するものではない。また形式論理が「ア・プリオリ」とか「分析的」とか「直観」であるとかを判定するためには，形式的論理を我々がどのようにして獲得したのかという発生論的な考察に関わることになる。論理の世界では，すでに記述された概念体を対象にしているため，これらの用語には関わらない[7]。従って，「真理」の問題も存在しない。要するに，「論理」とは，認識主体がトートロジーという伝達形式を使用するということに過ぎないのである。

【形式論理自体の妥当性の判定は，論理の構造に属する】 形式論理自体の妥当性は論理自体の構造から判定されるのであって，論理の構造以外のものによって保証されるのではない。論理の世界の妥当性の規準は，トートロジーのみである。論理の語用論（記号と使用者との関係）や意味論[8]（記号と事物・事象との関係）の分野における妥当性は，論理概念（記号）だけでは処理できない。それは，他の世界（意義の世界・経験の世界）[9]との相互作用に属することだからである[10]。

【論理は存在から独立している】「論理」が，「実在」に対応している[11]かあるいは従属しているかの根拠はない。我々人間の論理形式と事物（事象）の存在形式が一致しているという確信

はどのようにして得られるのであろうか。人間の論理形式と事物（事象）の存在形式は⑴一致しているとしたら，その形式はいかなるものか。そして⑵一致しているとしたら，それはどのようにして証明されるのか。これらの問いには，プラグマティックにしか解答をあたえることはできない。というのも，実証的な事柄を含む証明対象を実証的に証明したり，論理形式の問題を含む証明対象を論理的に証明することは論点先取の誤りを犯すことになるからである。人間の身体的存在は事物の存在と同一であるから，認識を事物に適用した結果もたらされた事物の効果は，人間が身体的存在を介して再度確認することによってしか判定されえないのである[12]。とすれば，論理の事物に対する対応は，事物の存在そのものを記述するのではなく，事物に説明の仕方をあたえるものなのである[13]。記号論では，「意味論」は重要な研究分野であり，そこではさまざまな難問や対立が生じるが，それらの原点は存在論にある。そして最終的には，物理的対象の存在，抽象的概念の存在，論理的対象の存在そして数学的プラトニズムもすべて対象の存在を形而上学的[14]に想定しているのである[15]。

【論理の世界には「意味論」はない】 論理の世界は，記号と記号の関係の妥当性が判定される構文論（syntactics）のみが問われる[16]。記号と記号の使用者の関係である語用論（pragmatics）や記号と事物・事態との関係を取り扱う意味論（semantics）は論理の世界には参入しない[17]。

2. 論理概念とは

【論理概念】 論理概念[18]とは，その出自にかかわらず，テクニカル[19]に構成された概念である。またそれは，定義によってその内包が確定された概念である[20]。それが外延として経験的なものをもつかどうかは決定的な事柄ではない[21]。

【論理概念は定義によって構成される】 論理概念は，定義[22]によって構成される[23]。そして定義は，トートロジー[24]を含んでいる[25]。つまり論理概念の特質は，無矛盾性にある。これはトートロジーによって保証される[26]。そして論理概念は形式的であるがゆえに，抽象的な表現をとり[27]実体として存在するかどうかということには一切関わりをもたなくなる。論理概念は，この無矛盾性によって，その出自に有していた経験的ないしは形而上学的性格を捨て，他の二つの概念，形而上概念・経験概念から離れる[28]。

【論理概念の一般性】 論理概念は，一般性[29]を有する。ここで一般性といわれていることは，論理概念は形式的であり，内包をみたす外延は，有形，無形を問わず，すべて含むということである。つまり論理概念は，内包によって定式化されるのであって，外延によって定式化されるのではない[30]。

【論理の世界】 論理の世界は，この論理概念によって推論もトートロジー形式によって構成されている世界である[31]。つまり論理の世界は，実在や価値を担わない概念がトートロジーによっ

て連結されている公理体系である[32]。そしてトートロジーは，「論理実体」というようなものとして存在するのではなく，単なる記号と記号の関係である。

【論理概念には真理はない】 論理概念は，「真」について中立である[33]。論理概念の妥当性は，その正確性によって判定される。そしてその正確性とは，内包の厳密性である。内包の最も完全な厳密性は，トートロジー[34]である。通常の複合命題の真・偽は，要素命題の存在論的な可能性によって判定されるが，論理形式の真理条件[35]が恒に真になるような複合命題はトートロジーとよばれ，そしてそのためにトートロジーは存在論から離脱する。

【論理の世界は仮構の世界である】 論理の世界は，定義語としての論理概念を用いながらトートロジーという推論形式で構成されているため実在とは独立した仮構[36]の世界である[37]。論理の世界はゲームと同様の構造をしている[38]。「詰め将棋の構造」は，次のように構成されている。1. 定義：駒は，すべてそれぞれ完璧に定義されている。使用規則：駒の使用規則も完璧に定められている。このような設定のもとで，「玉」を詰める（「解」の存在が前提にされており，その「解」にいたるまでの手順を明示すること）。2. 推論の規則：㈠最短の手数で詰め上げること。＝単純性を探求すること。㈡禁手を打たないこと＝無矛盾であること。論理の世界での作業はこのような詰め将棋と同様なプレイをしているのである[39]。

【因果律は論理の世界では単なるトートロジーである】 論理の世界では，必然性が基底にある。因果律[40]も必然性を主張する[41]が，論理の世界は因果性によって必然性を与えられているのではない[42]。ところで因果性の必然性は何によって保証されるのであろうか。因果性そのものがすでに必然的なものとして存在するのは，因果律という形式がトートロジーであるからである[43]。そしてこのような因果律を現象に当て嵌めるのである[44]。

【論理概念は共役的である】 形而上概念は共役的でなく，経験概念の共役性は相対的であるが，論理概念は共役的である。それというのも，論理概念は形式的に定義された概念であり，また論理概念によって構成された公理体系は，いかなる概念体でも使用することができるからである[45]。この点において論理の世界は，独立した要素命題とか「理論負荷的な」要素命題とかといった論争には一切関与しない。

3. 論理概念の要請

【論理概念の魅力】 思想を顕示するためには，記号を用いて記述することから開始する。その記号は，記号の対応物が観念であろうがあるいは存在物であろうが，それを表現するためになされるのである[46]。しかしながらその思想は模写的な記述だけに終わらず説明という段階に進むことになる[47]。そして説明とは，模写を概念的に再構成することである。それは，認識は他の同意を得ることを欲するからである。論理概念は，この説明的な目的のために要請される。説明の論理的明証性や単純性[48]は，研究者を惹きつける[49]。

【研究の成果は伝達されなければならない】 科学的業績とよばれているものは，表現され，吟味されて合意され，そして我々の公共的財産として蓄積されていく[50]。研究が科学上の研究であると認知されるためにはその経過や成果は秘教的でなく公共的でなくてはならない[51]。そしてそれらが表現されるためにはなんらかの記号を用いなければならず，それらが人びとに伝わるためには公共的な形式によって構成されていなければならない[52]。そこで公共的な伝達形式として論理概念が要請されるのである。特にその伝達相手が不特定多数の人びとであるならば，不特定多数の人びとに理解されうる共通の形式でなければならず，トートロジーのみがそうした機能を備えている。なぜならばトートロジーこそが万人が有する形式であるからである。

【理念型は論理概念である】 理念型は，論理概念として彫琢されたものである[53]。本来，理念型は歴史的分析のための分析用具として創出された概念であるが[54]，論理的に加工されることによって論理的概念として登場することになる[55]。このようにして創出された理念型は仮構的性格を有する[56]。そしてそうした論理概念（理念）は，仮構であるがゆえに我々の理解を深めることになる[57]。

【論理の世界には分析命題はない】 ヒューム（D. Hume）やカント（I. Kant）によって分析命題と総合命題の区別がなされて以後，経験主義と演繹主義のそれぞれの陣営から絶え間ない論争がおこなわれてきた。特に，分析命題については必然性とそれから帰結する真理性が主張された。そしてそのとき人々の脳裏にあったのは，数学の身分証明であった。しかしながら論理の世界においては分析命題という称号は必要としない。論理の世界におけるすべての必然性は，トートロジーに帰せられるのであり，そしてトートロジーは恒真であって，それはア・プリオリではなく，ただの記号の使用規則である[58]。

4. 論理概念の役割

【論理の世界は概念体を整合的なものとする】 論理の世界は整合的である[59]。論理的演繹とは，言葉を変えての言い換えである。従って，論証の機能とは，叙述の整合性・非整合性を検出することである[60]。概念体はさまざまな概念の総体として構成されるため，不整合をきたすことがある。論理の世界はそうした不備やまた自己撞着な不備を暴露する。それに加えて陰伏的な知識をも明らかにする[61]。

【論理概念は説明の道具である】 論理とは，精巧に工夫された説明装置（道具）である[62]。つまり自己を含めて説得の手段なのである[63]。そして論理の世界では，原因の究明よりも性質の規定が先にくる[64]。論理の世界では，その記述の順序からして原因の究明よりも定義が先になされる。そして定義するということは，性質を規定することである[65]。

【論理概念は誤謬を摘出する】 論理概念または論理の世界は，一見，論理連関によって繋がっているかにみえる関係をトートロジーによって明らかにし，その誤謬を炙りだす[66]。また，論理

概念である理念型を通して現実を透かしみることによって論理概念からの偏倚を映しだすことができる。さらに論理概念は研究者が作業仮説や理論を構成する場合，これに推論的に正しい方向を指示し，その仮説や理論のなかに組み入れられるべき要因を洩れなく研究者に教える。

【論理概念は予測においても役立ちうる】 論理概念は，非実在的であっても現実の予測力として有効性を発揮する(67)。現実に適応する予測は，現実の事柄が述べられている理論からのみ導出されるとか，「真理」からのみ正しい予測がなされるということの必然性はない。その必然性を解き明かそうとするならば，前者については自然の斉一性の証明を俟たなければならず，後者については「真理」の内容が明確化されなくてはならない。予測力の成果の判断は，その的中率にある。そこにはフィクションの果たす役割がある(68)。

【研究用の経験データは論理概念の後に作られる】 研究対象としての経験的データは，論理概念の後に作られる。経験データは論理的助力を得なくても獲得可能であるが，研究対象としての経験的データは，あるがままに存在しない(69)。それらは，形而上概念によって選び取られ(70)，その後論理的に加工されてはじめてデータとして使用される。そしてそのとき論理概念はフィクションであるがゆえに，経験概念と対応するときには対応の規則を必要とする(71)。

〈注〉

（1）［27］〈466〉［下］p. 13

（2）［26］p. 60. 訳書 p. 131. またローティ（R. Rorty）も次のように述べる。「しかし，それ〔クーンへ向けられた猛烈な憤慨：引用者注〕がことに激しかったのは，主に職業的哲学者の間である。哲学者は科学者の合理性を防衛することにやっきとなっていた……。（略）彼らは，この伝統〔鏡のメタファーが近代科学の制度的基盤で果たした中心的な役割：引用者注〕に対するクーンの批判が深層にまで達していることや，また近代科学の興隆を防衛してきたイデオロギーが危機に瀕していることを洞察した点では正しかった。彼らが誤っていたのは，その制度がこのイデオロギーを必要としている，と考えた点であった。」（［37］p. 333. 注(16) 訳書 p. 413. 注(16)）

（3） カント（I. Kant）は，悟性の作用として論理的機能をあげているが，論理の世界とは，カント的に表現すれば「悟性の世界」である。「与えられた現象（それが直観であると概念であるとを問わず）に含まれている多様なものは，悟性によって統覚一般のもとに統摂せられる。そしてかかる悟性作用が即ち判断の論理的機能なのである。」（［19］［上］p. 185）

（4） ウィトゲンシュタイン（L. Wittgenstein）は，「具体的には，世界の記述のような形をしていながら実際には世界記述ではなく，記述の形式を示しているような命題の身分を，数，論理学，数学，そして自然科学に関して，それぞれ論じていく。（略）ウィトゲンシュタインは，自然科学の法則命題もまた世界記述ではなく，記述の形式を与えるものであると論じる。その議論の内実と射程はなお慎重に検討されねばならないが，」（［50］pp. 236-238）『論理哲学論考』の基本的構図である「基底と操作」という用語を用いれば，「世界記述」とは「基底」であり，それは経験的なもので「操作」が施されるものであるのに対して「記述の形式」とはア・プリオリな「操作」であり，世界記述の形式である。そして「論理」は，「操作」なのである。（［50］pp. 233-238）

（5） 初期言語は，自己の内部における意識作用としての認識と自己表現作用としての伝達とが言語記号として一緒になっており，そこでは「認識」は自己に対する伝達作用なのである。つまり伝達としての論理は思考の整理を含むのであり，自分自身が思考するとき論理を用いて整理するのは，自己に対

する伝達作用なのである。そしてその整理作用あるいは整理されたとき我々はそれを「認識」とよぶ。

（6）「論理」は，ともとギリシャ語の ‘*λόγος*’（ロゴス）から派生したものであるが，これは人間がものを言い，話をするときの言葉を指した。そしてそれはただの音声ではなくて，相手にも理解されるものであった。（[42] p. 2）その後「論理」が，正しい推論のカノン（規範）としてそして同時に真理の発見に導くオルガノン（機関・道具）として彫琢されていくのであるが，本論文で取り上げられている「論理」は，原初的な伝達形式に限定する。なぜならば，言語自身には「真理」を保証するものはなにもないからである。

（7）飯田は，これらの用語の混同について次のように述べる。「論理実証主義者が，『分析的』『ア・プリオリ』『必然性』という三つの概念をほとんど無差別に用いてきたことは，本書でもたびたび強調して来たことである。」（[17]［Ⅱ］p. 209）。そして飯田は，この点についてのカントの不注意を指摘している。「結論的に次のように言えよう。すなわち，カントにおいて，『ア・プリオリ―ア・ポステリオリ』という区別は，『必然的―偶然的』『確実―不確実』とも，その外延において一致し，しかも，それだけではなく，しばしば，これらふたつの区別のかわりまで勤めている，と。三種類の区別に対するカントのこうした無造作な態度は，実は，現代にまで持ち越された。たとえば，（略）エイヤーの『言語・真理・論理』のなかの『ア・プリオリ』と題された章では，『ア・プリオリ』・『必然性』・『確実』という三つの概念がまったく無差別にもちいられている。」[17]［Ⅱ］p. 18）エイヤー（A. Ayer）のそれに該当する章句の一部をあげてみよう。「というのは我々が必然的な命題のア・プリオリな知識を持っているというのは本当ではあるが，カントが想像したようにこれ等の必然的命題の中には綜合的な命題があるということは本当ではないからである。必然的命題は例外なしに分析的命題，いいかえれば同義反復（トートロジー）である。」（[1] p. 84. 訳書 p. 91）私は，こうした用語の混同やそれから生じる「真」についての混乱を避けるためにも，「ア・プリオリ」とか「分析的」という用語を使用せず「同義反復（トートロジー）」という用語を使用する。

（8）記号と事物・事象との関係を示すのに「意味」という用語を用いることのミス・リーディングについては既に指摘した。（[44] p. 3）ウィトゲンシュタインについて言えば，前期の『論考』では意味の対応説の立場を採用している。例えば，「T2. 13 像のなかではその像の諸要素が諸対象に対応している。」（[49]［Ⅰ］p. 99）「T12. 1512 それ〔像〕は物差しのように実在に当てられる。」（[49]［Ⅰ］p. 103）しかしながら後期の『探求』では意味の使用説を採用する。例えば，「『意味（Bedeutung）』という語が用いられる ── 全ての場合でないにしても ── 大多数の場合に於いてその語の使用（Gebrauch）である。」（[52] p. 33）この部分はさまざまな論議を引き起こしているが，意味の使用説に移行したと推測される文言は『青色本』にも『哲学探究』にもみられる。「さて，以下のような言語使用について考えよ：私は或る人を買い物に遣る。その際，私は彼に『五つの赤い林檎』と書いてある紙片を渡す。彼は店に行ってその紙片を店の人に渡す。店の人は『林檎』と書いてある箱を開け，次に或る表の中に『赤い』という語を捜し出し，それに相対している色見本を見出す。次に店の人は（略）数詞を順に『5』まで唱え，夫々の数詞を唱える度毎に，その箱からその色見本の色を持っている林檎を一つずつ取り出す。── このように，そしてこれと似たように，人は語を使用するのである。（略）しからば，『5』という語の意味（Bedeutung）は何か？　── そのような事は，ここでは全く問題にならない。ただ『5』という語はいかに使用されるか（wie gebraucht wird），ということのみが，問題になるのである。」（[52] p. 2）

（9）モリス（C. Morris）は，記号過程における三項（記号媒体・指示対象・解釈者）をそれぞれの二項関係として抽出し，意味論・語用論・構文論として分類した。（[25] pp. 22–23. 訳書 pp. 12–13）しかしながら，記号論では本来，指示対象も記号化され，解釈者の解釈も記号化された全く記号のレベルでの記号の関係を取り扱うべきではないであろうか。本論文の概念の類別化はそのような方向を向いたものである。

（10）ミーゼス（L. Mises）によれば，「アインシュタイン（E. Einstein）は次のような疑問を提出した。『いかなる経験にも依存しない人間理性の所産である数学は，どうして実在の対象にかくも見事に適

合するのだろうか。人間の理性は，経験の助けなしに，純粋な推論によって事物の特徴を発見することができるであろうか。』そして，彼の答えは『数学の定理が実在に言及するときは，それらは確実ではなく，それらが確実である限り，実在には言及しない』というものであった。』」（［23］p. 39. 訳書 p. 62）近代の実証主義的論理が，それ以前の形而上学的論理に取って代わり近代人の実証的信念の底流になっている大きな背景として，近代以前の時代と比較した物理学の目覚しい発達がある。大庭によれば，「こと『科学』的な真理の『客観性』にかんしては，“客観 object〔＝対象〕のあるがままを捉えているから，実際に成果を挙げえたのであり，成果をあげえたから，結果的に，普遍妥当的になったのだ” という考え方が，ごくふつうのジョーシキになってまいります。」（［31］p. 191）そして続けて，対応説への批判としてクワイン（W. V. O. Quine）の主張を次のように述べる。「しかるにクワインの主張は，こうでありました。科学理論といえども，選択的に手直しされつづけていく“人工の織物” であり，第一義的に，織物総体として真偽を問いうるにすぎない。如何なる文も，従って実在と如何に直接に対応しているとされていた文でも，訂正を免れえない。我々が確実に言えるのは，現に我々が真と認めている理論のネットワーク総体が，過去に照らして未来を予測する道具として，目下のところウマク働いている，ということだけである。」（［31］p. 192）本論文も実証主義に対してはこのような立場に立っている。論理が事物・事象のあるがままに対応していること（すなわち客観的であること）の証左として近代物理学の成功事例を引いてくるとしても，それはそうした論理以上の論理をいまだ有していない人間の世界での証拠づけにすぎない。例えばいまだ未知の星の住民が，我々以上の物理学的成果を有しており，そしてそこで我々の論理とは異質な論理が用いられているとするならば，その論理こそ事物・事象のあるがままを述べていることになる。こうした極端な事例を想定しなくても，地球上には人類以外に生物でも人間以上の能力を発揮する生物は多数存在する。そうした生物のもつ論理（広義の「論理」にはそうした能力も含まれる）の方が人間が用いる論理よりも「真に」客観的なのであろうか。「客観性」についてこのような比喩から言いえることは，実用的であればそれにしたがって客観性の程度が決まる，というプラグマティックな表現に変形されるということである。しかしながら実証主義が確信している客観性は，このような相対的な「客観性」ではない。また「実証主義的な」科学の成功が「実在論」を証明すると主張することは，「科学の成功」に価値を認めているということを前提にしているのである。従って実在論もそうした価値関心の内部でのみ主張されうるのであり，実在論は，価値関心とは独立に（「『宇宙的規模の亡命』を果たした高みから，我々の言語・理論の網を被せられる『以前』に」［31］p. 291）事物・事象を在るがままに述べる，と主張することはできないのであり，「《実在と対応していたがゆえに成功した》という“説明” は，その実在を措定している言語・理論の内部で，はじめて説明となる，というクワインが洞察した」条件つきの実在論なのである。（［31］pp. 294–299，を参照）本論文での実在論的な立場は，このようなプラグマティックな観点に立つ。そしてこのような立場は，論理の世界というよりは経験の世界に属することである。なお，クワインは経験の世界においても物理的対象を仮定された存在者とみなす。「物理学的対象は，経験の流れについてのわれわれの叙述を円滑にするために仮定された存在者であり，それはちょうど，無理数の導入が算術の法則を単純化するのと同様である。有理数だけを扱う初等算術の観点からは，有理数と無理数の両方から成るより広い算術は，便利な神話といった資格をもつことになろう。」（「35」p. 18. 訳書 p. 26）「経験主義者として，私は，科学という概念図式が，究極のところ，過去の経験をもとに未来の経験を予測するための道具であることをやめはしない。物理的対象は，便利な仲介物としてこの場面に概念上導入されたものである。── それも，経験から定義されるものとしてでなく，認識論的にはホメーロスの神々と比べられるような，還元されえない指定物として導入されるのである。」（「35」p. 18. 訳書 p. 66）またニーチェ（F. Nietzsche）は，価値の決定者が人間であることを見抜いていた。「もろもろの価値の根源は人間である。人間が，おのれを維持するために，それらの価値を諸事物に賦与したのである。── 人間が元で，それが諸事物に，意義，人間的意義を創（つく）り与えたのだ。それゆえ，かれはみずからを『人間』，すなわち『評価する者』と呼ぶのである。」（「28」p. 122）

(11)　大庭によれば，「対応説」についてクワインの立場は次のようなものである。「クワインの「『ことばと対象』の主要な課題は，《指示》および《対応》という，実在論の根本概念の脱呪術化にあります。語は，《指示》という作用によって摩訶不思議にも，物へと繋ぎ止められ，そういう語を並べてできた文は，物の間の実在的関係を『写しとる』ことによって，実在と《対応》する《客観的に真》な文となる，という，例の根本観念の魔力を祓うところにあります。」（[31] p. 193）そしてクワインは，「語が社会的な道具である以上，語が生き残るのには客観性が重要となる」のであり，語の「客観的な用法というのは，まさにその間主観性のゆえに」社会の訓練によって教え込まれる。社会の訓練方法とは，「個人がなにか赤いものを見ているのが観察されるとき 'Red' を発すれば可とし，赤くない物を見ているのが観察されるときそれを発すれば不可とする，というものである。」こうして我々に「客観へのひきつけ（the objective pull）」が生じ，「矯正的な手がかりを無数に活用しながら」さまざまな赤い対象（物理的対象）に対する 'Red' への反応をことごとく 'Red' という型に入れて再編成するのである。（[34] pp. 5–8. 訳書 pp. 8–13）本論文は，「対応説」を批判するこのようなクワインの「条件つきの実在論」を採用する。

(12)　プラグマティックな存在証明方法は，「絶対的な存在」を証明するのではなく，効果の程度に応じた相対的な存在しか証明できないし，また効果の確認（合意）には「整合説」が用いられることになる。

(13)　言語の使用について専ら「記述」を支持するのであれば，「対応説」を容認しなくてはならなくなる。また本来，言語は公共性を必要条件としているので，言語の使用には必ず報告し理解を期待し合意を得ることが含まれている。そしてそのためには「説明」を要するのである。ローティは，「認識論から解釈学へ」としてその代置を目指す。そして「解釈学は，さまざまな言説相互間の関係を，一つの可能な会話を織りなす繊維の間の関係と見なす。」（[37] p. 318. 訳書 p. 370）

(14)　内井によれば，「実在と知識の対応説」は形而上学的な仮説である。「ある意味で最も素朴で直截な答えを与えるのが，『実在と知識との対応説』である。それによれば『数学が経験世界に適用できるのは，実在自体が少なくとも近似的に数学的構造をもつからである。また，物理的理想化（分析の方法）によって明らかにした法則を用いて世界を記述し，予測することができるのは，実在自体が近似的にそれに対応する構造をもつ』からである。この主張は，論理的にも経験的にも証明できるものではなく，このように仮定すればわれわれの知識がなぜ世界に適用されて成功をおさめるかが理解可能になる，という形而上学的な仮説である。』（[43] p. 129）またローティは，「自然の鏡」という視覚的メタファーによって想定されたあらゆる心的な存在者を全面的に否定する。「われわれの伝統的哲学のほとんどは，命題よりもむしろ描像によって，言明よりもむしろメタファーによって規定されている。伝統的哲学を虜にしている描像は，さまざまな表象 ── あるものは正確であり，あるものは不正確である ── を内に含み，純粋に非経験的な方法によって研究することのできる巨大な鏡としての心という描像なのである。鏡としての心という概念がなかったならば，表象の正確さとしての知識という概念が思いつかれることはなかったであろう。（略）このような戦略が念頭になかったならば，哲学は『概念分析』，『現象学的』，『意味の解明』，あるいは『われわれの言語の論理』や『意識の構成的活動の構造』の吟味から成り立っているとする最近の主張は意味をなさなかったことであろう。」（[37] p. 12. 訳書 p. 31）本論文の狙いは，ローティが批判する伝統的認識論の構造の，三元論からのオーバーホール（overhaul）であって必ずしも伝統的認識論の否定ではない点ではローティと同じ線上にいるわけではない。しかしながら，ローティの主張とかなり近いところにいる。

(15)　実在の世界に論理が存在するとするならば，どのような種類の論理も存在することになる。例えば弁証法的論理もそうであるし，神秘主義者たちさえも彼らが用いる論理も自然の論理だと主張する権利はある。そして我々はそれが実在しないという否定的根拠を挙げて彼らを説得できない。論理の世界が，記号の世界であるとすればそれは記号を創出した記号の世界のみの形式に従うのである。こうした徹底的な構文論は『論考』のウィトゲンシュタインにみられる。数についてフレーゲ（G. Frege）やラッセル（B. Russell）のプラトニズムに対してウィトゲンシュタインは構成主義を採用

する。ウィトゲンシュタインによれば，「操作」と「基底」とは独立に成立し，「操作」はア・プリオリに成立するという立場を主張する。つまり数は「操作」なのであるから「数はなんらかの世界の性質ではなく，『数えること』として，われわれが記述を為し，報告を理解するために要求される能力のひとつとして捉えられる。」と考えていたのである。（[30] p. 242）その後，後期のウィトゲンシュタインはそのような考えを批判して「言語ゲーム」という考えに向かうことになるが，それを私は，「ア・プリオリ」という用語を破棄し，直接に「約束事」として言語を扱うという方向に向いたものだと考えている。なお，数学的存在者について付言すれば，数学的プラトニストであるゲーデル（K. Gödel）は，次のような理由によって数学的存在者を認める。「しかしながら，集合論の対象は感覚的経験の遠く及びえないものであるにもかかわらず，我々は確かに，これらの対象についても何らかの知覚（perception）に類するものを持っている。［集合論の］諸公理が自らを真なるものとして受け入れるよう我々に対して迫ってくるという事実から」（[8] pp. 483–484. 訳書 p. 36）数学的知覚の存在を確信し，それによって数学的存在者の存在を知覚する。私は，このような立場に対しては，唯名論的立場からゲーデルを批判したチハラ（C. Chihara）のいくつかの反論を支持する（[4] pp. 211–227. 訳書 pp. 97–119）。例えば，「物理学的対象へと至る推論のための基礎を形成したのは，どのような理論であり，またどのような信念の体系であろうか。いつわれわれはそのような立場にあったのか。そしてわれわれがそのような立場にあったという教説をいかにして正当化するのか。これらは，ゲーテル的なプラトニズムが考察すべき問題の幾つかであるが，それらは，数学的対象の存在という問題は『外界の存在という問題の正確な複製』であり，われわれは物理的対象の存在を信じるためにもっているのと全く同じ程度に十分な理由をその存在を信じるためにもっている，と結論する前に，考察されるべきなのである。」（[4] p. 218. 訳書 p. 105）

（16） 構文論とは，いくつかの要素命題を結合して真理関数をつくる場合の結合形式である。そして矛盾律，排中律，同一律などの論理的命題は事態の成立・不成立に関わらず真である。つまりそれらは恒真的な命題であり言葉をかえれば同義反復式である。ウィトゲンシュタインによれば，「T6. 1 論理の諸命題は同義反復式である。」（[49]［Ⅰ］p. 430）

（17）「意味論」を論理の問題から排除することは，フレーゲからは始まった論理学の歩みを無視することであるが，本論文の論理の世界は形式だけに注視するため排除される。その理由は，「意味論」には指示対象の存在論的な問題が必ず生じるからである。むしろ本論文では，概念化作成のさいに認識主体の志向（認識意図）にそって概念は経験概念と形而上概念と論理概念に生まれでると考えている。つまり，経験概念は，経験的志向から，形而上概念は，価値（意味）志向から，論理概念は，論理的志向から，生みだされる。そして概念を体現する言葉には，denotation（指示）と connotation（ある語の本来の意味に加えてさらに別の意味を暗示すること）と定義語があり，それぞれが，経験概念，形而上概念，論理概念に対応すると考えている。そして本論文のテーマである「概念体の構造」は，こうした概念レベルでの構造分析なのである。「意味」（文の「意味」も含めて）の問題は，論理概念が他の概念と協働したときに取り扱われなくてはならないのである。フレーゲ以来の文あるいは命題の「意味論」は，その思想枠に実在論の伝統，換言すれば自然科学（特に物理学）の世界が想定されていると私は考えている。しかしながら「意味論」は，観念論的立場からでも行動論的立場からでも接近できるのである。

（18） 論理概念は，「論理語（例えば「そして」・「あるいは」・「ならば」・「ない」）」とは異なる。ウィトゲンシュタインにとっては，論理語は「操作」を表わす。またウィトゲンシュタインは，「論理的概念」について次のように述べる。「論理的概念なるものは存在しない。たとえば『もの』，『複合』，『数』といったものがそうでないかと思われるかもしれないが，これらの用語は概念ではなく論理形式を表す表現である。（略）このような論理的概念は擬似概念であって，普通の概念のように述定されることができない。」（[51] p. 10. 訳書 p. 33）

（19）「テクニカル」という表現は必ずしも適切ではないが，経験概念が有している「実在」や形而上概念が有している「価値」という性格に関わりあうことなく，という意味を表現するために用いた。

(20)　その一例としてフリードマン（M. Friedman）が定式化した恒常所得仮説をとりあげてみよう。フリードマンは恒常所得仮説を次のように述べた。「これらの方程式はそれだけでは何ら実体的な内容をもたない。それらは単に定義的なものである。所得および消費の恒常成分は，個々の消費単位については直接には決して観察できないものである。われわれは消費単位が支出しまた受け取ったものを事後的に観察することができるだけである。しかし，もしも恒常成分と変動成分との間の関係についてのある種の仮定を認めるならば，われわれは観察されたデータから，家計の集団について恒常成分についての推測を行なうことができる。私が設けた特定の仮定は，消費ならびに所得の変動成分が対応する恒常成分と，またお互いに無相関であると考えられるということである。この仮定は本書に提示された仮説の一つの本質的な部分をなすものである。（略）これらの仮定は方程式（β）および（γ）に実体的内容を吹込むものである。このとき方程式（α）（β）および（γ）は，所得に対する消費の比率が実際所得の増加とともに減少する性質をもった，実際所得に対する実際消費の観察される回帰をも包含する……。」（[6] pp. 222-223. 訳書 pp. 415-416）つまり，C は，Y の関数であるという仮説のもとで，$Y = Y_p + Y_t$, $C = C_p + C_t$, という定義式に，「Y_p と Y_t は，無関係」，「C_p と C_t は，無関係」，「Y_t と C_t は，無関係」を付け加えれば，残るは「Y_p と C_p が，関係がある」ということになる。この仮定が恒常所得仮説の要なのである。こうしてこれらの，当初は空虚だった（つまりいかなる外延も有していなかった）定義式に経験的な事例（つまり外延）が盛り込まれることになるのである。

(21)　もちろんこのような完全な形での論理概念は見当たらない。論理概念の典型例である数学記号においてさえもなんらかの経験内容をもっていると主張されるかもしれない。経済学において論理概念の典型的な例をあげるとすれば，ドブリュー（G. Debreu）の公理体系のなかに見いだされる。その一例をあげれば次のようなものである。「すなわち生産者とは，生産計画を選択（および遂行）することを役割とする経済主体のことであり，」（[5] p. 37. 訳書 p. 62）また消費者とは「現在時点でなされる，全将来にわたっての消費計画を選択（および遂行）する」（[5] p. 84. 訳書 p. 84）経済主体である。

(22)　定義について教科書的（[29] pp. 32-37 および [42] pp. 18-21）に叙述すれば，次のようになる。定義の仕方：1. 指示による定義　2. 唯名論的定義　3. 類概念と種差による定義　4. 発生的定義　5. 対立概念との関係を示すことによる定義　6. 枚挙による定義　7. 名目的定義　8. 操作的定義　定義の規則：1. 定義は，定義される概念の本質的属性を明示しなければならない。2. 定義される概念の外延は，定義する概念の外延に等しくなくてはならない。3. 定義は循環を含んではならない。4. 定義は，（対象の本質徴表のうちに否定的なものが含まれているとき以外は）否定的であってはならない。5. 定義は曖昧さを含んではならない。しかしながら論理の世界では，循環定義の禁を破る。なぜならば論理の世界での定義は，被定義語と定義語句とは同義反復の関係にあるからである。つまり「眼科医は，眼医者である。」エイヤーによれば，「我々はそれ等〔分析的命題：引用者注〕が経験において打破られないのは，それ等が経験的世界について如何なる確信もなさないからであることをみた。それ等は単に，言葉をある仕方で用いようという我々のとりきめを記録しているにすぎない。（略）如何なる観察も “7＋5＝12” という命題を破りえないことを我々が知っているのは，単に“7＋5” という記号は “12” と同義的であるという事実にもとづいているにすぎないのであり，これはすべての眼科医は眼医者であるという我々の知識が，『眼医者』という記号は『眼科医』と同義的であるという事実にもとづいているのと同様である。そうして同様な説明が他のすべてのア・プリオリな真理にあてはまるのである。」（[1] pp. 84-85. 訳書 pp. 91-92）「眼科医」で指示される具体的事物と「眼医者」で指示される具体的事物が同一であることによって同義的であるのではない。「眼科医」という記号は，「眼医者」という記号と同義的に定義されているのである。「明けの明星」と「宵の明星」とは，指示対象は同一であるが，記号としては同義的ではないのである。（[44] p. 2）

(23)　論理概念は，抽象概念・普遍概念・一般概念・ア・プリオリな概念（純粋概念）と同一ではない。どのような概念もさまざまな様相を持ち合わせているため明確な一線を引くことは不可能であるが，論理概念は，基本的には定義されたいわゆる言葉の上での概念である。

(24)　ウィトゲンシュタインの『論考』にみられるトートロジーは，次のようなものである。1. それは

要素命題のあらゆる値に対して真となる。2. それは経験的に無意義である。3. それは実在の特定の事態（または事象）を叙述しない。4. それは諸対象の特定の結合に対応しないで，あらゆる任意の結合に対応する。したがって，それは特定の符号結合ではない。（[49]［Ⅱ］p. 178）

（25） 定義に定義を求めると無限後退に陥るため，定義を定式化すると必ず同義反復が含まれる。例をドブリューにとってみよう。ドブリューは，次のように述べる。「生産の研究においては，組織の法的形態（株式会社，個人営業，合名会社．……）とか活動の種類（農業，鉱業，建築業，製造業，運輸業，サービス業，……）とかを抽象して生産者の概念を得る。すなわち生産者とは，生産計画を選択（および遂行）することを役割とする経済主体のことである。」（[5] p. 37. 訳書 p. 62）それではこの文中に含まれる「生産計画」とはどのように定式化されているであろうか。「いま所与の正整数 n 人の生産者がおり，そのそれぞれは添数 $j = 1, \ldots\ldots, n$ を以て示されるものとしよう。ある生産者，たとえば第 j 生産者については，一つの（現時点でなされる，全将来にわたっての）生産計画というのは，そのすべてのインプットとすべてのアウトプットの量を特定化することにほかならない。」（[5] p. 37. 訳書 p. 62）つまり「生産計画」とは，「任意の生産者によってすべてのインプットとすべてのアウトプットが特定化された計画」なのである。「生産計画」を定義するさいに「生産者」を用いずに定義ができるであろうか。「概念の定義の規則（定義は循環を含んではならない）」は不可能なのである。確かに，定義される概念をそれ自身によって定義することは循環論法に陥るが，しかし究極的には定義は循環論法に落ち込まざるをえない。例えば「経済学とは，経済学的対象をとりあつかう科学である」という言明は，定義としては不当とされるが，それを「経済学とは，経済的対象をとりあつかう科学である」と定式化してみたところで，「経済的対象」は，経済学が対象にする対象なのである。あるいはこのような定義づけとは異なり，定義語に被定義語を含めないような定義をとりあげてみよう。「経済学とは，合理的な選択の理論である。」ここで「合理的な選択」とは，‘Cost-Benefit Approach’ のことである。とするならば，経済学＝Cost-Benefit Approach であり，それは，Cost-Benefit Approach＝経済学なのでもある。

（26） ラッセルによれば「ヴィットゲンシュタインは，論理学が全部トートロジーから成っていると主張する。私はかれのこの考え方は正しいと思う。」（[38] p. 119. 訳書 p. 151）と述べる。続けてラッセルは，「このことと結びついて大変重大なもうひとつのことがある。それは，すべての原始的命題が相互に独立である，ということである。」（[38] p. 119. 訳書 p. 151）そしてラッセルは，このことについて疑問を呈する。ウィトゲンシュタインも後期になると原子論を否定し，トートロジーの役割も後退し，代わりに，言語の内的関係や言語が使用される状況をも視野におさめた構文法的言語観があらわれることになる。野矢は，ウィトゲンシュタインは要素命題の相互独立性を撤回したが，『論考』の考えは基本的には受け継がれておりむしろ「文法」というより大きな規則体系へと関心が向かったのであるとする。（[30] pp. 141–143）

（27）「こうしたなか古典派経済学のアンカーであった J. S. ミルは，富の獲得と消費のみに専念する人間類型を，純粋に理論的抽象概念としてとらえ，そうした抽象こそ，科学が必然的にとらなければならない方法だと主張した。つまり，徳目としての側面が切り落とされ，実在する人間の抽象モデルという位置づけが明確に与えられたのである。」（[18] pp. 152–153）

（28） ウェーバー（M. Weber）は，機関誌の新シリーズを上梓するにあたって次のように述べた。「いかなる機関誌も，理論的概念構成と実在との関係を，認識批判的―方法論的に解き明かすことによって，原理的な明晰性を創出するという課題さえ，首尾よく達成していない。」（[47] pp. 184–185）そこでウェーバーはこれに答えるため，「理念型（Idealtypus）」という概念構成方法を提唱したが，これこそ，経験概念から形而上概念を通って論理概念にいたる道行きを示している。ウェーバーによれば，「理念型」とは「歴史的に与えられた（略）『理念』」（[47] p. 112）を「矛盾のない連関 ―― その意味で（思想上の）宇宙（Kosmos）―― にまとめあげ」（[47] p. 269）たものである。歴史的に存在するとは，「理念型」がかつては経験概念として存在していたのであり，それらの多数のなかで理念とみられるものが「理念型」として選ばれたのであるということは，「理念型」が形而上概念

の性格を有したものであったということであり，そして「理念型」が内部矛盾のない概念に鍛え直されたということは，「理念型」が論理概念として構成されたことなのである。つまり，ウェーバーの「理念型」は，経験概念・形而上概念の性格を一度は有していたのであるが，最終的に論理概念として鋳造されたものなのである。ここにおいて「没価値性」が主張されることになる。

(29)「一般性」と「普遍性」はときには同義に用いられるが，「普遍性」には実念論の臭いがするため論理の世界で使用されるには不都合な用語である。この点において意義の世界の形而上概念の性格は一般性よりも普遍性で表現されるべきである。（[45] pp. 108-109. 注(9)）また論理学における「一般概念」は，通常，その外延が2つ以上の対象から成り立っている概念であり，それには登録的概念（外延の要素が有限）と非登録的概念（外延の要素が無限あるいは可算不可能）が含まれる。しかしながら論理概念の一般性には，空概念（外延の要素がまったくない）も含まれる。

(30) 飯田によれば，「多くの哲学者に受け入れられていると思われる見解は，論理的概念を他の概念から区別するものはその普遍的適用可能性に存するというものである。つまり，論理的概念は，何か特定の領域だけにかかわるものではなく，あらゆる領域においてまったく同じ仕方で適用されるというのである。」（[17] [Ⅲ] p. 4）経済学におけるドブリューの商品の定義はその好例である。「要するに商品とは，物的，時間的，空間的に完全に特定化された財または用役のことである。（略）このような商品概念が完全な一般性を有することを常に心に留めておかねばならない。（略）商品の定義がひとたび把握されたなら，一般理論の諸結果を具体的な用語で解釈することには何の困難もないであろう。」（[5] p. 53. 訳書 pp. 53-54）ミーゼスによれば，「だれもが日々の行動において，繰り返し繰り返し，思想と行為のカテゴリーの不変性と普遍性を立証している。他人に話しかける者，他人に情報を与え説明しようとする者，質問をしたり他人の質問に答えたりするものは，すべての人に共通なもの，すなわち人間理性の論理的構造にアピールできるからこそ，そのように行動することができる。A は同時に非 A であり得るとか，B よりも A を選ぶことは同時に A よりも B を選ぶことであるといった観念は，人間の精神には考えられず，ばかげて見えるだけである。」（[23] p. 35. 訳書 p. 59）この引用における「論理的構造」を，ミーゼスは，「根本的論理関係ならびに因果性と目的論の原理」（[23] p. 35. 訳書 p. 58）と考えているが，その実はトートロジーにほかならない。トートロジーこそが人間に共通する理解の論理的構造である。ミーゼスは，先験的な推論としてこのことを実は承知しており，先験的推論のもつ役割を次のように述べる。「先験的な推論は純粋に概念的かつ演繹的であって，同義反覆と分析的判断以外の何ものも生み出すことはできない。その含意はすべて，前提から論理的に導き出されるもので，既にその中に含まれていたものであった。したがって，先験的推論は我々の知識に何も加えることができないという反論をよく耳にする。幾何学のすべての定理は，既にその公理に含まれている。直角三角形という概念には，既にピタゴラスの定理が含まれている。この定理は同義反復であって，それを演繹すれば分析的判断となる。だからといって，概して幾何学は，また特にピタゴラスの定理は，我々の知識を拡大しないと主張する者は，だれ一人いないであろう。純粋に演繹的な推論からの認識もまた創造的であって，以前には入れなかった領域にも我々の精神が接近できるようにする。演繹的推論の重要な仕事は，一方ではカテゴリー，概念および前提の中に含意されていたすべてのものを際立たせるとともに，他方では含意しないものを示すことである。以前には隠れていて分からなかったことを，一目瞭然にすることがその使命である。貨幣という概念には，貨幣理論のすべての定理が既に含まれている。数量説は，貨幣の概念に事実上含まれていないものは，何一つ我々の知識に加えない。それは変形し，展開し，解明するけれども，分析するだけであるから，直角三角形の概念とピタゴラスの定理との関係のように同義反復である。だからといって，数量説の認識上の価値を否定する者はだれもあるまい。（略）実在の完全な認識を我々に伝えないのは演繹的科学体系の欠陥ではない。その概念と定理は，実在の完全な把握へ接近していくための精神的用具であって，それら自体では，すべてのものについて事実に関する知識の総体でないことは確かである。定理と，生きており変化している実在とは，相互に対立するものではない。理論，すなわち人間行為に関する一般的演繹諸科学がなければ，人間行為の実在の理解はない。」（[23] pp. 38-39. 訳書 pp.

61–62）なお，ミーゼスは，ここで論理概念の役割として，認識の整理化と実在を解明するための手段を考えている。これは，本論文において論理概念の役割として述べられるものである。

(31) フリードマンは次のように述べる。「理論は，それを言語としてみるならば，なんら実質的な内容をもっていない。それは一組の同義反復（トートロジー）である。」（[7] p. 7. 訳書 p. 7）またウェーバーの提唱した理念型も（因果結合による）トートロジーであり，ウェーバーは，そのような理念型を用いて次のような推論をおこなう。つまり理念型から示唆された方向に，問題の先行条件を探り出し，それに関する第二次的理念型を構成し，第一次理念型と第二次理念型との関連を，やはり思考の上で理念型的に想定して仮説を構成するのである。（[47] p. 272，を参照）

(32) 経済学の分野における「論理の世界」の典型的な仕事は，ドブリューの『価値の理論 ── 経済均衡の公理的分析 ──』にみられるが，そのなかでドブリューは「事を厳密に運ぶためには，どうしても分析を公理的におこなわざるを得ない。」（[5] p. x. 訳書 p. vii）と述べている。また公理主義者のヒルベルト（D. Hilbert）は，経済学においても公理的思考による理論の存在を示唆している。（[13] p. 195）そしてヒルベルトは，公理的方法について彼の一般的見解として，「ここにのべた公理的な方法の取扱いは，いわば個々の学問領域の土台をより深く沈めることであり，ちょうど家を増築して高くし，しかも安全を期したい場合には，どの家でもこのことが必要になるのと同じである。（略）およそ科学的思考となりうるものは，すべて，一つの理論を形成できるほど成熟すると，公理的方法を介して間接的に数学に帰属するものだと思う。（略）公理的方法を目じるしとして，数学は，科学一般における指導的な役割を，天職とするように思われる。」（[13] pp. 196–206）と述べているが，これは今日の理論経済学とよばれている分野の様相を如実に言いえている。またミーゼスの人間行為学も論理的構築物である。「人間行為学はア・プリオリである。そのすべての定理は，行為のカテゴリーから出発する演繹的推理の成果である。人間行為学の判断を分析的であると言うべきか，総合的と言うべきか，またその手順を同義反復的であるに『すぎない』と評すべきか否かは，言葉の上で興味があるだけである。」（[24] p. 44. 訳書 pp. 54–55）いずれにせよ，ミーゼスは，「人間行為学のあらゆる定理は，行為のカテゴリーから論理的推理によって演繹される。」（[24] p. 44. 訳書 p. 55）と述べる。ミーゼス自身はカテゴリーをア・プリオリな「存在」と考えているため，ミーゼスの理論を仮構だと断定することには誤解を招くかもしれないが，そのような「存在」を除外すれば，（「同義反復」と評されてもそれは言葉上のことにすぎないとの断り書きを述べているけれども）人間行為学は同義反復的な仮構と化してしまう。だからといって，ミーゼスの主張の通り人間行為学が無意味なものだというのではなく，むしろそのような性格を有しているためにそれは本節で述べているような役割を果たすのである。

数学を含めた自然科学の分野ではこうした事例は枚挙にいとまないが，社会研究に関する分野でいまひとつの好例を挙げるとすれば，ロールズ（J. Rawls）の『正義論』[36] は（著者はそのことをうたってはいないが）公理的な叙述方法で述べられている。また哲学の分野でのスピノザ（B. Spinoza）の『エティカ』[40] は，その典型的な書物として誰しも思い浮かべるものである。

(33) マクロスキー（D. McCloskey）は，次のように述べる。「こんな回りくどい議論をするのは，前提（assumptions）さえ自由に選択できれば，厳密な推理によってどんな結論（conclusions）でも望みのままに導出できるという常識的な論点を示したいからである。（略）前提が A プライムなら，サムエルソンの結論 C とは反対に，賃金は収斂（均等化）しないという結論 C プライムになる。そしてまた前提を A ダブル・プライム A″ とすれば，均等化するという結論になる。前提が A トリプル・プライム A‴ なら結論はノーだし，A カドラップル・プライム A⁗ ならイエスだ。などなど。現実の世界に入り込む必要は一切ない。」（[22] pp. 85–87. 訳書 pp. 106–109）また「だが，世の中のある客体が実際にも円であるのか，人々の目的からは十分円と見なしてよい近似物であるかは，論理学や数学的な考慮とはどんな関係もない科学的判断に属する問題である。したがって結論 C は現実世界で真であるかないかについて，論理学は何も発言しない。論理学が発言できるのは，哲学の専門用語を使えば，『妥当』（Valid）かどうかという点だけである。『妥当』とは A または A′ または A″

（『A ダブル・プライム』）の前提から，厳密かつ整合的な手順を踏んで結論 C が導出されているとの意味である。サムエルソン的悪徳が恐ろしい悲劇であるのは，妥当性（validity）の問題を真実（truth）の問題と混同し，すべての可能な前提 A，A′，A″，A‴…とあらゆる可能な結論 C，C′，C″，C‴……との間のあらゆる可能な連携を究明することが科学である，と考えていることだ。」（[22] p. 84. 訳書 pp. 105-106）この引用は，マクロスキーの「正統派」経済学に対する非難の弁であるがまさにマクロスキーの主張の通り論理の世界には実在論的な「真」は入り込む余地はない。あるのは形式論的推論の「真」であり，それも「真」とよぶよりは，マクロスキーのように「妥当」とか整合性とかトートロジーとかとよぶ方が適切である。それを「真」であると判断し主張することが実在を暗示することになるのである。こうして「サムエルソン的悪徳」が蔓延することになる。

(34)　ウィトゲンシュタインの「同義反復式（トートロジー）」（[49]［Ⅰ］p. 285）を意味する。たとえトートロジーの観念の出自がヒューム的な経験であったとしても，構文論では概念の出自は一切問わない。トートロジーが成立することの根拠が存在論にあるのではなく，全く構文論的にトートロジーとして成立するのである。

(35)　真理条件とは，命題を真にするような事態の成立・不成立の組合せであるが，事態の成立・不成立ということには事態の実在の成立・不成立が関わりあってくる。トートロジーは，要素命題のあらゆる値に対して真となる真理関数であり，したがって事態の成立・不成立という事情には一切関わりをもたないことになる。

(36)　そのため，次のような本音が洩らされることになる。「ここでマクロ経済活動における期待の役割を明らかにするために，次のようなモデルを考えてみよう（そもそも，経済モデルというものは，簡単な設定を使って経済メカニズムの論理を明らかにしようとするものなので，荒唐無稽の宇宙であることが多い）。」（引用者，一部修正）（[9] p. 34）またウィトゲンシュタインは，「論理的に可能」と「化学的に可能」と区別して次のように述べる。「『論理的に可能』と『化学的に可能』を比較せよ。例えば人は，正しい原子値に従って作られた構造式（例えば，H-O-O-O-H）が存在する原子の結合（分子式では，『H_2O_3』と表わされる）を，『化学的に可能』と呼ぶ事が出来よう。しかし勿論，そのような原子の結合は存在しなければならない，というわけではない。しかしまた，HO_2 という分子式に対しては，正しい原子値に従って作られた構造式を有する如何なる原子の結合も，現実に対応する事ができない。［したがって，『HO_2』という分子式で表わされる原子の結合は，『論理的に可能』であっても，『化学的に不可能』なのである，という事であろう。］」（[52] p. 292〈521〉）

(37)　竹田によれば，「たとえばヴィトゲンシュタインはこう言っています。数学者は 2×2＝4 という計算をする。そのとき彼はただ，頭の中で自分で作った『規則』を運用しているにすぎない。ところが数学者はしばしば，2 だの 4 だのという数を『実在するもの』と思いこむ。と。（『哲学探究』）『有限』，『一』，多」，『同』，こういったものは人間が頭の中で作り出した概念であって，“実在するもの” ではありません。しかし，概念語を使っているうち，人は，無意識のうちにこれを現実に存在するものと錯覚するのです。」（[41] p. 8）経済学における仮構についてミーゼスは次のように述べる。「経済学特有の方法は，仮構（imaginary construction）という方法である。この方法こそが人間行為学の方法である。狭義の経済学研究の分野で，それが注意深く精密化され完成されたのは，経済学が少なくとも現在までに人間行為学の中で最もよく発達した分野であることによる。一般に経済学的と呼ばれる問題について意見を述べようと思う者は，だれでもこの方法を用いる。（略）仮構は，それを構成する際に用いられる行為の要素から論理的に生じる事象の連鎖を概念で表したものである。それは，行為の基本的カテゴリー，すなわち取捨選択の行為から究極的に導き出された演繹の成果である。このような仮構を設定する場合に，経済学者は，分析したい実在の条件を仮構が叙述しているか否かという問題には，かかわらない。また仮構が仮定しているようなシステムが現実に存在しており，作用しているか否かという問題も，わざわざ考えたりしない。想像も及ばず，自己矛盾しており，または実現不可能な仮構でさえ，経済学者がその使い方を知っていれば，実在の理解に役立ち，不可欠なサービスを提供することができる。仮構という方法は，その成功によって正当化される。（略）仮構を設

定するための主な方式は，現実の行為に存在する一部の条件の作用を捨象することである。そうすれば，これらの条件が欠如した場合の仮定的結末を把握し，それらの存在による影響を考えることができる。（略）仮構という方法は人間行為学に不可欠であって，人間行為学と経済学の研究のための唯一の方法である」（[23] pp. 236-237. 訳書 pp. 263-264）そしてミーゼスは，仮構から得られた概念として「本源的利子」をあげている。（[23] p. 237. 訳書 p. 264）また新古典派経済学の仮構性について宇沢は，次のように述べる。「新古典派の理論は，以上述べたような前提条件〔生産手段の私有制・生産要素価格に従う所得分配・合理的個人への分解可能性：引用者注〕をみたす一つの虚構の世界をつくりあげて，そこでの経済循環のプロセスが現実の世界におけるメカニズムを描写するという方法をとってきた。（略）新古典派の虚構性に対して真摯な反省を加えるというより，逆に，理論をもともと虚構の世界における演繹的・論理的演算としてとらえてきたともいえる。このことは，ドブルューのような公理主義の立場にもっとも端的なかたちであらわれている。」（[46] pp. 111-112）次の引用は，そのドブリューから論理的加工の一例（「完全分割性の仮定」）である。「第二のクラスに属する財の範疇としてトラックを考えてみよう。この財を完全に記述するには，モデル，走行マイル数，……といった要素を挙げねばならない。そしてこれに対応する商品を定義するには，さらにその日付と場所とをつけ加えねばならない。明確に定義されたトラックの量は，通常は整数で表わされるであろうが，ここではそれが任意の実数をとりうるものと仮定してしまおう。経済学の現段階では，このような完全分割性を仮定することがどうしても必要となるのである。もっとも，大量のトラックを生産あるいは消費する経済主体については，この仮定は十分認めるところであろう。」（[5] p. 30. 訳書 pp. 50-51）

(38) ベル（E. T. Bell）によれば，クーチェラ（L. Couturat）は，ヒルベルトが彼の形式主義的信条を宣言するよりも 30 年先立って次のように述べた。「数学者は《量》そのものを定義することは決してしない。が，哲学者ならそうしたくなるだろう。数学者は《量》の相等，和，積を定義する。そこでこれらの諸定義が，《量》の数学的なすべての性質を決める，というよりむしろ構成する。そしてもっと抽象的で，もっと形式的な方法で，いろいろな記号を定め，同時にそれらの記号を組み合わせる規則を規定する。これらの規則は，記号を特徴づけそれらに数学的な価値を付与すれば十分なのである。要するに数学者は，恣意的な約束にしたがって，数学的実在を創造する。それはちょうど将棋で，駒の動きと駒の間の関係を支配するルールによって，いくつかの駒が定義されているのと同じやり方である。」（[2] pp. 623-624. 訳書［下］p. 295）

(39) 論理の世界と詰め将棋にはいまひとつの興味深い類似がある。浜田は，次のようなエピソードを披露する。「雨の箱根の山道を歩きながら，マンデルは，『富士山はどこにあるのか。富士山の存在証明を疑いたくなる』などとじょう談をいっていた。私は，『先生の論文は皆短いので，モデルの背景にどんな構造があるのかわかりにくいことがあるのですが』と聞いてみた。マンデルは，いささか色をなして，『自分は読者が，私の他の論文も読んでいることを期待している。他で書いたことはくり返さない』と答えた。そして，『論文は詰め将棋のようなものだと思っている。詰め将棋は一つの手筋だけみせるためにある。盤上にあるすべての駒を見せる必要はない。実際の経済が将棋全体だとすれば，経済学の論文は詰め将棋で，一つの経済論理を摘出して提示すればよい』と。この助言ほど，私が理論を組み立てるとき，そして大学院生を指導するときに役立った助言はない。」（[10] pp. 30-31）この引用の趣旨は，局所的理論の有様を示唆したものであるが，マンデルが例えとして「将棋」をあげたことは，理論の将棋的構造が彼の脳裏にあったかもしれない。（マンデルが実際に「将棋」と言ったのかどうかはわからないが，少なくとも浜田にはそう思えたのであろう。）

(40) ブンケ（M. Bunke）によれば，因果性については三者の対応がみられるという。つまり，「因果連関の問題は哲学者達を大まかに三つの組に分ける：因果論者（causalist）あるいは汎原因論者（panaitist），彼らは保守派とみなし得よう；非因果論者（acausalist）あるいは非原因論者（anaitist），彼らは虚無主義的傾向を示している；そして，半因果論者（semi-causalist）あるいは半原因論者（hemiaitist），彼らが，進歩的あるいは建設的傾向の代表者達であると思う。因果論は，世界の

あらゆる結合は因果的である，と独断的に考えることによって，ディターミネイションのあらゆる非因果的カテゴリーを否認するという伝統的態度である。これに対して非原因論をとなえる虚無主義的人々は，因果結合という概念は，『盲目的崇拝物』である（ピアソン），『類推による虚構』である（ファイヒンガー），『迷信』（ウィトゲンシュタイン），あるいは『神話』である（トゥールミン），と宣言する。」（[3] p. 118. 訳書 p. 283）ピアスン（K. Pearson）によれば，「われわれが確実性（certainties）を取扱うのは，因果性（causation）の領域ではなくて，概念の領域においてなのである。」（[33] p. 118. 訳書 p. 283）そしてブンゲは，「これらの見解は，一般に，あらゆる種類の説明 ── 勿論その中には，因果的説明も含まれている ── を拒否し，それに代えるに記述をもってするという，現象主義の考えと結びついている。」（[3] p. 333. 訳書 p. 343）と考えている。この分類法に従えば，本論文は非因果論者のグループに分けられることになろうが，それは存在論的因果性が論理的必然性を保証するということにはならないという点においてである。むしろことは逆であって，トートロジーとしての因果律をもって存在論的因果性を絡め捉えようとするのである。また「記述」と「説明」については，現象をあるがままに陳述した現象主義的な「記述」は不可能であり，いかなる記述もなんらかのフィクションが参入する，と本論文は考えている。思想が概念体として表現されるためには，論理概念によって再構成されなければならない。因果的説明もそうした概念再構成のためのフィクション的装置である。そしてこのフィクション的装置は，知識の整理・伝達そして知識に基づく予測でその有用性を発揮するのである。

(41)　経済学の分野で「因果律について」の考えの一例として，ミーゼスは次のように述べる。「実験的知識の出発点は，A が必ず B という結果を生むという認識である。B を生起させるか，または B の生起を回避するために，この知識を利用することを行為と呼ぶ。行為の根本目的は，B を生起させるか，それを阻止するかのいずれかである。哲学者が因果律についてどう言おうとも，因果律によって導かれなければ，人間はいかなる行為もなし得ないという事実は残る。また，因果律関係を知らない人間を想像することもできない。この意味において，我々は因果律をカテゴリー，すなわち思考と行為のアプリオリと言えよう。（略）因果関係の認識こそ，世界における人間の方向づけの第一歩であり，活動が成功するための知的条件である。因果律というカテゴリーに対して，満足な論理的認識論的ないし形而上学的基礎を見いだそうとする努力は，すべて失敗せざるを得なかった。因果律について言い得るのは，人間思考のみでなく，人間行為についても因果律がアプリオリであるということだけである。」（[24] pp. 20–21. 訳書 pp. 24–25）しかしながらミーゼスのこの弁は，A が生じれば必ず B が生じるという因果律を用いて A という行為の選択を決断することが人間行為学であるという主張であるが，このミーゼスの論法は，存在論と認識論を混同している。それは連鎖的現象の発生をア・プリオリと速断しているからである。むしろ事態の因果律的認識とは，存在論的な連鎖的現象の発生をア・プリオリな認識形式を用いて把捉しているのである。そしてア・プリオリとは，単なる構文論にすぎないのである。

(42)　マッハ（E. Mach）は，因果律は思考のためにあるのであって，自然界には存在しないと述べる。「自然界には原因も結果も存在しない。自然は**一回**しか存在しない。したがって A がつねに B に結びつけられるという同じ場合の繰返しは，つまり同じ状況の下で同じ結果が生じることは，いいかえると原因と結果の連関の本質は，私達が事実を模写するという目的のために行なう抽象の中にだけ存在するのである。」（[20] p. 440）

(43)　本来，「因果律」は，フィクションであるということについて，ニーチェは次のように述べる。「われわれは，自然科学者がやっているように（また彼らと同様に，今日その思考において自然主義化されている連中がやるように ──），〈原因〉と〈結果〉を誤って物化してはならない。（略）われわれは〈原因〉と〈結果〉とかいうものをただ純然たる概念としてのみ，いいかえれば記述や了解のための便宜的なフィクションとしてのみもちいるべきであって，説明の具にしてはならない。」（[28] p. 43）またハンソン（N. Hanson）は，因果律が主張する「客観性」に抗して，因果律は理論のパターンのなかでのみ定立されるとする。「“原因 X” と “結果 Y” の背後にある概念を理解するためには，

理論のパターンに対面せねばならない。つまり，X から Y への推論を保証してくれる理論のパターンである。」（[11] p. 64. 訳書 p. 137）このようにハンソンは理論負荷的な立場から因果律を捉えるが，それに盛られた内容を取り除いてしまうと，「因果律」そのものはその背景になにかを必要とするわけではない。それは単に論理的な形式に過ぎない。ハンソンは，「しかし原因というのは，事実と同様，単なる視覚データではない。感覚所与空間におけるもので，“原因” とか “結果” とかいうラベルを貼ることのできるものはない。」（[11] p. 59. 訳書 p. 126）と述べる。確かになんらかの感覚的与件が原因あるいは結果として存在するのではないが，私たちは認識を論理的に整理するために，“原因” とか “結果” とかというラベルを感覚データにも貼り付けるしまたそれ以外にも森羅万象のものに貼り付ける。そしてその「貼り付け」作業は，ハンソンの指摘のようになんらかの「理論」に基づいてなされ，従ってその結果は「理論負荷的」なものとなる。本論文で私は，その「理論」が実は形而上概念であることを主張しているが，しかし「因果律」そのものは貼り付けのラベルにすぎないのであって，それをどのようなものに貼り付けようとしているかは論理の世界では決めることはできない。それを指示する（形而上概念という）指揮官が必要なのである。

(44) カントは因果律を「カテゴリー（純粋悟性概念）」の一つとみなす。（[19]［上］p. 15）従って，因果律はア・プリオリで必然的な概念（形式）なのである。そしてこの純粋形式を用いて現象を理解するのである。「綜合的統一の必然性を有する概念は，原因と結果との関係〔因果関係〕の概念である。即ち原因は，結果を原因についで継起するものとして，時間において規定するのであって，単に想像のなかで結果を，原因よりも前にあり得るような（それどころか結果を，その継起がまったく認められ得ないような）何か或るものとして規定するのではない。それだから我々は，現象の継起を ── 従ってまた一切の変化を，原因性の法則〔因果律〕に従わせることによってのみ経験，即ち現象の経験的認識すらも可能ならしめるのである。従ってまた経験の対象としての現象自身も，この法則に従ってのみ可能となるのである。」（[19]［上］p. 266）カントは，因果関係の概念をア・プリオリとみなすが，結局は，「原因は，結果を原因についで（時間的に）継起するもの」と定義することによってトートロジーの形式で述べているに過ぎない。

(45) 論理概念はその形式的一般性のためそれらが開発された学問分野にかかわらず他の学問分野にも持ち込まれる。その一例を次のような主張にみいだすことができる。「他の社会的な諸学問分野と接しながらもそこから分かたれている経済学に関して，明確な領域を切り分けることは最終的には不可能である。経済学はそれらの諸分野全てに浸透しまた逆にそれらによって浸透されている。ただ一つの社会科学があるだけである。経済学に帝国主義的な侵略的力を与えるものは，われわれの分析的カテゴリー ── 希少性，費用，選好，機会等々 ── が真に普遍的に適用されるということである。さらに重要なのは，これら諸概念が，個人的決定水準での最適化と社会的水準における均衡との，区別されるが絡み合った諸概念の中へ，構造的に組み込まれていることである。こうして経済学は，実に社会科学の普遍的な文法を形づくっているのである。」（[16] p. 53［14］p. 110. 訳書 p. 153）「希少性，費用，選好，機会等々」が論理概念としての資格で他の分野に用いられることは可能であるし，また用いられてもいる。しかしそれらが効用最大化や利益最大化という形而上的な命題を併せ持ち込んでいるとしたならば，まさしくそれは “帝国主義的” となる。経済学自体もこれと同じ侵略に侵されており，物理学的帝国主義や数学的帝国主義に蹂躙されている。「均衡」という論理概念はその代表的な一例である。

(46) 現象主義的な模写説に与する論者は多い。例えば，マッハ（E. Mach）は，「あらゆる科学は，事実を思考の中に模写することによって，経験と置きかわる，つまり経験を**節約する**という使命をもつ。」と述べる。（[20] pp. 437-438）また『論考』のウィトゲンシュタインは，「T2. 1512 それ〔像〕は物差しのように実在に当てられる。」（[49]［I］p. 103）という立場に立っていた。しかしながら，マッハは，その文言に引き続き次のように述べる。「事実を思考の中に模写するとき，私達は決して事実を**そのまま**模写するようなことはなく，私達にとって**重要な**側面だけを模写する。」（[20] p. 439）この作業過程で論理概念を必要とするのである。つまり，「思考を節約する」ために私達は論理概念

をもってそれをおこなうのである。本論文は，概念の構成における模写的作業は認めるがそれはマッハが述べた限度までであって，いわゆる「模写説」そのものに与するものではない。むしろ「模写」はメタファーでありフィクションであると考えている。既述したように（注(14)）ローティは，模写も「自然の鏡」という視覚的メタファーとして全面的に否定する。そしてローティがかくも過激に否定する理由の一端は，認識の正当性がこの視覚的メタファーによって根拠づけられてきたからである。私には，「模写」というメタファーは認識のフィクションとしては説得的に感じられる。それは，二元論的な認識論，つまり認識主体と認識客体という二分法を作業仮説として採用することによって我々の認識を分析しようとする立場に立っているからである。しかしながら認識の正当性をそこから引っ張りだそうとするものではないことはローティを受け入れている。

(47)　科学から，形而上学的要素を有している「説明」は排除され，「記述」が代置されるべきであると主張する論者は多い。（[3] pp. 282–286. 訳書 pp. 293–296）しかしながら「説明」の形式は，必ずしも形而上学的であるわけではない。むしろ論理的な形式で定式化されることが「科学」的であり，内容について形而上学的性格が問われるのである。因果律という形式が形而上学的であるわけではない。それは純粋に論理的形式の一つである。それになにを盛るかによって形而上学的となるのである。ピアスンは，「思惟の経済」との関連で，第 3 版への序言として，「今では誰もが科学は何かを説明するものだなぞとは信じていない。われわれはみんな，科学は速記的な記述・思惟の経済である，と感じている。」（[33] 訳書 p. 10）と述べる。また「説明」が「記述」に取って代わられた状況を第 2 版の序言において次のように述べている。「この文法（本書）がはじめて公刊されてから 8 年たったが，その間に本書に述べてある見解が著者が夢想もしなかったほどにひろく一般の承認を得てきたことは，疑いのないところである。（略）一歩一歩，科学者たちは，機械論（mechanism）は諸現象の根底にあるものではなくて，科学者たちが諸現象を簡潔に記述し要約する助けにする概念速記にほかならない，ということを承認するようになりつつある。一切の科学は記述であって説明ではないということ（略）は，次の世代の人びとには平凡陳腐なことに思われるようになろう。（[33] p. 5. 訳書 p. 6）」しかしながら「記述」はそのままでは公共的に伝達可能ではない。自己のメモとかデータ以上の報告をなそうとする「記述（例えば，理論）」は，説明をし承諾を得ようとするのである。「思惟の経済」によって処理された「記述」も，公共的に伝達可能なものとなるためには「記述」に論理的加工が必要となり，「説明」的性格が加わることになる。ウィトゲンシュタインも異なった点から「説明」を拒否する。「そして我々は，如何なる理論も提示してはならない。我々の考察には，如何なる仮説も存在してはならない。全ての説明が取り去らねばならず，そして，記述のみがその場所を埋めねばならない。」（[52] p. 87）『論考』から『哲学探究』へのウィトゲンシュタインが写像説を保持していたのか破棄したのかは定かではないが，「説明」をこのように拒否したのは，言語の使用説の立場に立ったからであろう。お使い籠のなかの「五つの林檎」と書いてあるメモやあるいは「チェス・ゲーム」のルール・ブックは，説明や解釈ではなくて実践であるが，しかしながらその指示が実行に移されるには同意を必要とする。そして同意を得るためには「説明」が必要なのである。

(48)　フリードマンは，自己の開発した「恒常所得仮説」を定式化したさいに，単純性そして単純性ゆえに有する豊饒性について述べている。「しかし，経験的な仕事では常にそうであるように，この同じ実証資料と一致する他の多くの仮説が存在するはずである。われわれがわれわれの仮説を選ぶ所以は，それがわれわれの注目をひいた他の仮説にくらべてより単純であり，より実りが多いと考えるからであり，あるいは，われわれの仮説とは一致するがしかし他のある仮説とは一致しない追加的な実証資料を見出すことができるからである。」（[6] p. 157. 訳書 p. 294）つまり理論の本質は単純性にあるのである。「消費者はこの世の中の万物によって影響される複雑な生物であり，したがって多数による分析だけが消費者の行動から一貫した型を抽出することを望みうるのだと主張することによって，その複雑さの必要性を説きたくなるのは当然である。実際には，多数の変数を導入しなければならないということは失敗の証拠であり成功の証拠ではない。それは，分析者が問題の本質を解釈ないし理解する真に実りある方法を見出していないということを意味しているのである。というのは，そのよ

うな実りある理論の本質とはそれが簡単であるということだからである。」（[6] p. 231. 訳書 p. 431）カントによれば，「まさに現実と同じサイズの地図は役立たないのである。」（[19]［上］p. 75）

(49) ハイルボローナー（R. Heilbroner）・ミルバーグ（W. Milberg）によれば，ケインズ的合意が崩壊した 1960 年代後半からその空位を襲うものがいないまま，「精確さ」の脅迫観念に駆られて「真理」を軽視する風潮が広まった。「かくして，最近 20 年間の努力が経済学にとって注目せずにはおられない新しいビジョンの中核を確立するのに失敗してきた理由を探すとすれば，非主流派的アプローチが新しいビジョンのインスピレーションを提供するのに失敗したことに加えて，『テクニックが人を引きつける魅惑』を挙げなければならない。」（[14] p. 102. 訳書 p. 143）

(50) 知識のなかには表現されないもの（「暗黙知」）も，またある特定の仲間だけで（その仲間のみで理解される方法で）所有されている知識もあるが，本論文で対象にしている知識（概念体）は，いわゆる科学的知識とよばれている表現された公共的な知識を想定している。

(51) ヒルベルトの，注(32)に引用した「公理的思考」の要請は，「無矛盾性」と「完全性」の証明を与えることであるが，私は，科学の成熟化は公共性にあると考えている。そしてその公共性とは，万人に対する説得である。「一般に，“証明” と呼ばれるものは，いわば “万人に対する説得術” だから，証明を行なうときには，“論理的” に議論しなくてはならない。」（[15] p. 134）つまり，ある研究が成熟するということは，公共的に定式化されることが求められているのである。そしてそのように記述された体系がさらなる創造をもたらすかどうかということは論理ではなくて発見の領域に属することである。しかしながらこうした理論化の試みがその後偉大なる創造の契機となるということは多々生じる。非ユークリッド幾何学の発見はその好例である。

(52) マッハは，次のように述べる。「もちろん，伝達の手段たる言語も節約のための一つの設備である。経験は程度の差はあっても完全に，より単純でよりたびたび現われる要素に分解され，またつねに，伝達という目的のために，厳密性を多少とも犠牲にしても**記号化**される。」（[20] p. 438）こうしてマッハは科学的理論を思惟の経済とみなすのであるが，それは「ある人の経験を伝えることによって，別の個人がその経験をしなくてもすむようにすることにある。同じように，ある世代全体の経験は書物にして図書館に保存し，後の世代に伝え，彼らはその経験を節約させるのである。」（[20] p. 438）こうして神秘主義は科学から一掃されるとマッハは考えているが，こうした科学のもつ経済的機能だけでは神秘主義は一掃されない。神秘主義は公共性を有する論理性によってそぎ落とされるのである。

(53) 折原によれば，理念型とは次のようなものである。「たとえば，『交換』の概念は，日常おこなわれている無数の『交換』から，共通の標識を抽出したかぎりでは，単純な〈類概念〉にすぎない。しかし，いま，この概念を〔特定の価値理念からして経済行為の本質とされる「経済人」のもとで：引用者挿入〕『限界効用の法則』と関係づけ，経済的に合理的な経過として〈経済的交換〉の概念を構成するとすれば，これは，交換の『類型的』諸条件にかんする規定を含むことになり，〈発生的〉な性格を取得し，論理的な意味で〈理念型〉となる。」（[47] p. 289）より厳密に言えば，理念型には二つのタイプがある。1. 論理整合的理念型＝論理的に無矛盾の，つまりトートロジーによって構成されている理念型，2. 経験適合的理念型＝経験的（継起的な）な諸事象を因果連関で関係づけてそれらのみを抽出した理念型。そして折原は，この両者の微妙な差異に注意しながら次のように続ける。「〈理想型〉概念とは，〈それ自体として矛盾のない widerspruchslos［思想的宇宙］〉，〈それ自体として統一されたeinheitlich ひとつの思想像〉，〈われわれの考察にとって矛盾のないひとつの理想像〉と明記され，連関構成の規準が，無矛盾性・論理的整合性に求められていた。それが，ここでは，〈適合性〉［すなわち，〈法則的知識〉の形式で把握されている一般経験則に適っていて，そのとおりになる〈客観的可能性〉が大きい，公算が高い，という意味における経験的〈適合性〉］に，明らかに変更されている。」また「この問題は，（略）後の〈カテゴリー論文〉で，論理上整合的な〈理念型〉は〈理念型構成のひとつのばあいにすぎ〉ず，〈経験上『純粋な』型にまで昇華された事実〉も〈理念型〉を構成する，と明記されるにいたる。」（[47] pp. 273–274）なお，ウェーバーは理念型を創出するにあたって模写説を否定する。「歴史的実在の認識が，『客観的』事実の『無前提な』模写で

あるべきであり，またそうした模写が可能である，という見地に立つ者は，こうした理念型概念にいかなる効用も認めないであろう。」（[47] p. 116）

(54)　そのために，論理的整合性のみに関心ある合理的な理念型に，意味の世界から意味（価値）が与えられるとそこに無意識に規範を読み込んでしまう危険がある。ウェーバーは，次のような注意を与えている。「あらかじめ強調しておきたいのであるが，存在すべきもの，『模範的なもの』の思想は，われわれが語る，この純論理的な意味において『理想的』な思想形象からは，ここでとりあえず，注意深く遠ざけておかなければならない。」（[47] p. 116）「聖者」の理念型もあれば，「凶悪犯」の理念型もあるのである。（[47] p. 273，を参照）ウェーバーが「理念型」の第一義においたのは分析手段としての役割である。「それゆえ，抽象的な理念型の構成は，目標ではなく，手段と考えられる」（[47] p. 117）のであって，「理念型はむしろ，純然たる理想上の極限概念であることに意義のあるものであり，われわれは，この極限概念を規準として，実在を測定し，比較し，よってもって，実在の経験的内容のうち，特定の意義ある構成部分を，明瞭に浮き彫りにするのである。」（[47] p. 119）例えば経済学における効用極大化行動の主体として定義づけられた消費者や利潤極大化行動の主体として定義づけられた企業者は，このような「理念型」である。

(55)　理念型の二つのタイプ（論理整合的理念型・経験適合的理念型）の未分化の例がミーゼスにみられる。ミーゼスは，次のように述べる。「理解の態様を決定するのは理念型ではない。理解の態様の方こそ，それに対応する理念型を構築し利用することを必要とするのである。理念型は，知識のすべての非歴史的部門によって展開された観念や概念を用いて構成される。もちろん，あらゆる歴史の認識は，他の諸科学の研究成果によって規定され，それらに依存しているのであって，それらと決して矛盾してはならない。しかし，歴史的知識はこれらの他の諸科学とは別の対象と別の方法をもっているので，こうした諸科学はあるところから理解に役立たなくなる。したがって，理念型を非歴史的諸科学の概念と混同してはならない。」（[23] p. 61. 訳書 pp. 83-84）そして「経済学的概念での『企業家』は，経済史や記述的経済学が用いる理念型としての『企業家』とは別の社会層に属する。（略）歴史的理念型での『企業家』は，経済学での『企業家』と同じ人物ではない。」（[23] p. 61. 訳書 p. 84）また「我々がかかわっている経済学的カテゴリーは全く（purely）統合された機能を指すにすぎず，理念型は歴史的事象を指す。」（[23] p. 252. 訳書 p. 278）として注意を促す。「経済学を，ホモ・エコノミクスという理念型の行動を説明したものと解釈したのが，ドイツの経済学的国家学の歴史学派とアメリカの制度学派の根本的誤りであった。この学説によると，伝統的ないし正統派的経済学は，あるがままの，行為するがままの人間の行動を扱わずに，仮構的仮定的人間像を扱う。それは，『経済的』動機，すなわち最大限の物的ないし貨幣的利潤を獲得しようという意図によってのみ動かされる存在を描いている。このような存在に対応するものは実在の中に存在していないし，また決して存在したことがなかった。それは，非論理的な空論的哲学の妄想である。できる限り金持ちになりたいという欲望のみによって動機づけられている人はだれもいない。人生と歴史を扱うときに，このような幻想的人間模型に頼ることは無駄であると，批判者が言っている。たとえ，これが本当に古典派経済学の意味であったとしても，ホモ・エコノミクスは確かに理念型ではないであろう。理念型は人間の種々な目的と欲望のうち一側面だけの化身ではない。それは常に人間にせよ制度にせよイデオロギーにせよ，実在の複雑な現象の典型である。」（[23] p. 62. 訳書 p. 85）こうしてミーゼスは，「ホモ・エコノミクス」を「幽霊（phantom）」とさえ呼ぶのである（[23] p. 64. 訳書 p. 87 及び p. 651. 訳書 p. 659）。つまりミーゼスは，「ホモ・エコノミクス」を，経験適合的理念型としてとらえているのであり，歴史学派と制度学派が批判した「ホモ・エコノミクス」は，論理整合的理念型であったのである。「理念型」という方法論的概念を歴史的部門での用具として限定するミーゼスは，「理念型」を実在の色を残した「複雑な現象」として捉えているが，もし「理念型」がこのような概念であるとするならば，「理念型」たる概念を構築する目的を自らのうちに失ってしまうことになろう。「理念型」を構築する目的は，複雑な歴史的現象を論理的に分析しようとするための方法論的用具の創設である。そのため「理念型」の姿は歴史的現象であるが，その内容はまったく論理的に構成されている。その

意味でミーゼスが，「理念型は，知識のすべての非歴史的部門によって展開された観念や概念を用いて構成される」と述べたことは論理整合的理念型については正しい。「ホモ・エコノミクス」が理念型でないというのは，歴史研究のみに理念型の使用を限定しようとするミーゼスの立場からの帰結であるが，論理的に規定された「ホモ・エコノミクス」は，論理整合的理念型として理念型なのである。ワルラス（L. Walaras）の以下のような陳述の趣旨は，論理整合的理念型と合致する。「確かなことは，物理数学的科学は狭義の数学と同様に，その概念のタイプを経験から借りるけれども，それ以後は経験から離れるということである。これらの科学は現実のタイプから理念的タイプを抽象してこれを定義する。そしてこの定義を基礎として彼らの定理と証明の全構造を先験的に構築する。そしてその後に経験に立帰るが，それは結論を確認するためでなく，これを応用するためである。」（[48] p. 29. 訳書 p. 30）

(56) ウェーバーによれば，「そうした理念型概念は，歴史的に与えられた近代の交換経済的社会組織の『理念』であり，（略）経済的諸原理の平均としてではなく，同様にひとつの理念型として構成される。（略）この思想像は，概念的に純粋な姿では，現実のどこかに経験的に見いだされるようなものではけっしてない。それは，ひとつのユートピアである。（略）この純論理的な意味において『理想的』な思想形象」（[47] pp. 112–116）である。

(57) ウェーバーは，理念型の仮構性がもつ意義を次のように述べる。「当の理念型は，中世社会の『手工業的』でない構成部分を，その特性と歴史的意義とにおいていっそう鋭く把握する道へと，研究を導くであろう。もし理念型が，研究をこの結果に導くならば，理念型は，まさしくそれ自体の非現実性を露呈することによって，その論理的な目的を果たしたといえる。結果がそうであるばあいには，あるひとつの仮説が検証されたことになる。」（[47] p. 139）

(58) 分析命題がア・プリオリで必然的であるという論者の代表として論理実証主義者のエイヤーは，次のように述べる。「ヒュームと同様，私もすべてのほんもの（genuine）命題（proposition）を二種に分ける。すなわちヒュームの術語にいわゆる『諸観念の関係』（relation of ideas）についての命題と，『事実』（matters of fact）についての命題とにである。前者には，論理と純粋数学のア・プリオリな諸命題が含まれるが，これ等の命題は分析的であるというただそれだけの理由で，必然的であり，確実であるとする。いいかえると，何故これらの命題が経験に於て論駁されないかといえば，それ等が経験的な世界について何も確信せず，ただ記号（symbols）をある仕方で用いる方法についての我々のとりきめを記録しているにすぎないからである。」（[1] p. 31. 訳書 p. 1）それに対して全体論的立場に立つクワインは，次のように批判する。「こうして，言明の真理性が，言語的要素と事実的要素とに分析できると一般に想定したくなるのである。この想定のもとでは，事実的要素が無であるような言明が存在し，そうした言明が分析的言明であると考えるのが理にかなっているように思えてくる。しかし，こうしたことがどれもア・プリオリには理にかなっていると思えようとも，分析的言明と綜合的言明とのあいだの境界というものはまだ引かれていない。こうした区別がそもそも立てられるべきであるというのは，経験主義の非経験的ドグマであり，形而上学的信条である。」（[35] pp. 36–37. 訳書 p. 55）数学についていえば，本論文は，発見の文脈では数学的存在者が存在するかもしれないが，論理の文脈では，数学的存在者はなんら必要ではなく数学は規約である，という立場に立っている。

(59) マクロスキーは，「整合性」について次のように批判する。「こんな非科学的な研究法をどう弁護できるのだろうか？　ドゥブルーの弁明は黒板経済学者が繰り返しているものと同じく浅薄なもので，経済学は実験ができない分野だというものだ。したがって，私たち経済学者は，論理的整合性に頼る以外にない（なぜ『したがって』となるか，それを正当化する議論は示されていない）。（略）ドゥブルーはこう書いている。『経済学では十分に確実な実験的基盤が否定されている。だから経済理論は論理的な推論のルールに執着する以外になく，論理的な整合性を欠いた仮説は放棄されなければならない』（略）お気の毒ながら，ドゥブルーの説は間違っている。経済学者は経済に関して，驚くほど大量のデータを手にしている。（略）経済史家として告白するが，数学科の呪縛下にある，ある経済

学者が『データがない』といった時は大笑いしたくなった。（略）『単純性と一般性こそが，経済理論の主要な属性だ』とドゥブルーは主張する。結構ですこと。『単純性と一般性のもつ審美的魅力が，理論の設計家（デザイナー）に対して，公理と証明で表明された理論を望ましい目標とするに十分である』。自動車の車体の『デザイナー』みたいですね。数学的理解は『現代の多くの経済人の知的な欲求を満たす。だから彼らは数学それ自体を求める』。（略）ともかく物理学の歴史や数学自身の歴史さえもが，整合性は決して科学理論が有用であるために必要とされる主要な徳目ではないことを示している。（略）整合性といった基準に照らせば，ニュートンの無限小だがゼロでない数値の演算のような有用な数学的用具も，19 世紀後半になって（数学的に）より厳密化されるまでは利用できないままだったろう。（略）数学の厳密性は科学の能力と同一ではない。」（[21] pp. 79-81，pp. 98-102）このようなマクロスキーの批判は，成熟したと評価されている経済学の分野で，多くの研究者が「整合性」に呪縛されている様相を見事に描きだしている。しかしながら「整合性」は，必ずしも研究の有用性にとってではないにしても，研究の「主要な徳目」のひとつとして必要であり，それをマクロスキーによる批判の俎上にのぼらせないためにもその役割を批判的に限定すべきである。そしてそれは本論文の分析の目的のひとつでもある。

(60)　大森は，次のように述べる。「論証や証明とは，前提から帰結を論理的に演繹することである。そして論理学，特に近代論理学が明瞭に示したように，この論理的演繹とは，前提で述べたことの全部または一部を，言葉を変えて言い換えることに他ならない。したがって，論証とは，既に一度述べたことを繰り返し（別の言い方で）述べることなのである。それはパラフレーズなのである。論理的誤りとは，誤った言い換えであり，間違ったパラフレーズに他ならない。それゆえ，哲学者が論証を行なうとき，彼は同じことを繰返し述べているのである。彼が他の哲学者の誤りを論証するとき，彼はその哲学者が二カ所で違うことを言っていることを指摘しているのである。換言すれば，論証の機能はひと連なりの叙述の中の整合性或いは非整合性を検出することである。しかし，その叙述自身の機能は記述であり描写であって，論証はその記述または描写の整合性の点検という副次的な作業である（例えば，ピタゴラスの定理の証明の機能も，ピタゴラスの定理がユークリッド公理系の整合的な言い換えであることの点検記録の作成にある）。したがって，哲学的議論の本来の目的と機能は，（広い意味での）事実の記述文であって，論証や証明は記述の一形態，整合性の点検を伴った記述に他ならない。一種の保証票つきの記述なのである。哲学の議論が論証に溢れ，時には論証一本であるように見えるとすれば，それは哲学的議論が如何に不整合的記述の危険に満ち，それゆえ終始整合性の保証書を必要としているかを示すものであっても，その議論が記述ではないことを示すものではない。哲学の議論の標準的問答形式，『なぜ……』『……だから』，もまたその論証性を示すようにみえる。だがこの場合も，答は一つの事実描写を与え，問われた事実はその答が述べる事実の言い換えであることを述べているのである。それゆえ，この問答をきりなく続けることは意味がない。或る回で答は底をつく筈である。その底には最も広範な事実描写があり，それがまさに事実描写であることによってこれ以上何の根拠も必要としない（自然科学の問の底が，基礎法則という最も広範な事実描写であるのも同じ理由による）。」（[32] pp. 14-15）大森は，上の引用句のなかで，論証とは整合性のことであり，それはトートロジーであること，論証は，経験文である記述に整合性をあたえること，を示唆していると思われる。このような図式は本論文の趣旨に沿うものであるが，論証を記述に含めようとする点には無理がある。そのような立場では，記述に論理的加工が加わることによって生じる変形が見失われる危険性が生じる。記述文は，経験文に近いが，論証文は，説明文に近いのである。「近い」という表現は曖昧であるが，それは「経験文」・「説明文」自体が明確なものではないからである。

(61)　エイヤーは次のように述べる。「分析的命題は言語上の用法を呼び起こすが，さもなければ我々はそのような用法を意識することはなかったであろう。そうしてそれは，我々が確信していることや信じている事柄の意味の中に含まれているもので我々の思いもよらないことを明らかに示す。けれどもまた，我々はある意味では，分析的命題は我々の知識に何ものをもつけ加えはしない，といってよいこともわかる。何故ならばそれは我々がすでにしっているといってよいことしか教えないからである。

たとえばもし私が，五月祭に女王を選んで遊ぶ習俗の存在は樹木崇拝のなごりであることを知っていて，その習俗が英国に今なお存在することを発見するならば，私は，『P がQを内含し，P が真であるならばQは真である』という同義反復（トートロジー）を使って，英国には今なお樹木崇拝のなごりが存在することを示すことが出来る。しかし《英国には今なお五月祭に女王を選んで遊ぶ習俗がある》ということと《五月祭に女王を選んで遊ぶ習俗は樹木崇拝のなごりである》といった場合，私はすでに《英国には樹木崇拝のなごりが存在する》ことを確信してしまったのである。同義反復（トートロジー）の使用は実際私がこのかくれた確信をあらわれたものとすることが出来るようにしてくれる。（略）しかし人は自分の百科全書（エンサイクロピーディア）を編集するのに分析判断を用いて，もしそうしなければみすごしたような命題を包含するようになるであろう。そうして分析判断を記述することにより，人は自分のもっている知識の表を完全にすることが出来るばかりでなく，その表を構成している綜合的な諸命題が自己整合的な体系を形作っていることを確かめられるようになる。命題をどういうふうに結合すれば矛盾におちいるか示すことにより分析的命題は，人がその表の中に両立しない命題を含め，その表を自己撞着的なものとすることをふせぐであろう。」（[1] pp. 79–80. 訳書 pp. 83–85）エイヤーは，分析的命題はトートロジーであると考えている。「論理学と数学との真理は分析的命題即ち同義反復（トートロジー）なのである。」（[1] p. 77. 訳書 p. 79）

(62) 理論について道具主義者の面をみせるフリードマンは，「恒常消費関数」の理論を構築したさい次のように述べた。恒常所得仮説は，「個人が消費にどれだけを支出しようとするかを説明すべく精巧に工夫された考え」（[6] 訳書「日本語版への序文」p. 1）であり，「恒常所得仮説が，家計や個人が所得のうちどれだけを消費に向けどれだけを資産の増加に向けるかを説明する要因を理解し解釈するための有用な道具であることを示唆している。」（[6] 訳書「日本語版への序文」p. 2）そして「もちろん，この仮説と矛盾しているようにみえる実証もいくつかある。いくつかのこのような見かけ上の矛盾は，仮説の誤った解釈，ないし誤った適用によるものであることが明らかになっている。正しく適用し直すと，この矛盾は矛盾でなく，仮説をさらに確認するものであり，すくなくとも一つの場合にはそれがきわめて明瞭であった。どうしても矛盾と考えられるような他の実証に関しては，われわれの仮説に代る他のいかなる仮説によっても同じように解釈が困難である。」（[6] p. 2「日本語版への序文」）と述べる。

(63) ウェーバーは，概念を認識の手段と考えている。「カントに帰りつつある現代認識論の根本思想，すなわち，概念はむしろ，経験的に与えられたものを精神的に支配する目的のための思想的手段であり，また，もっぱらそうしたものでありうるにすぎない，（略）上記の〔歴史学派のいう〕最終目標は，かれ〔カントの考えに同調する人：引用者注〕には論理的に不可能と思われ，概念は目標ではなくて，むしろ，個性的な観点からみて意義のある連関を認識するという目的のための手段である。」（[47] p. 149）そして「認識する」ということは自己を含めた説得という行為なのである。

(64) ワルラスは，次のように述べていわゆる彼の一般均衡理論の分析にとりかかる。「初めの場合には私は原因から結果へと進んだが，第二の場合には結果から原因に遡っている。希少性と交換価値との二つの事実の関係を明らかにすることができるならば，これらのいずれのやり方をとろうと自由であるのはいうまでもない。ところで私は，交換価値のような一般的事実の組織的研究においては，性質の研究が起源の研究に先行すべきであると考える。」（[48] pp. 43–44. 訳書 pp. 43–44）

(65) スミスは（A. Smith），その著『諸国民の富の性質と原因についての一考察（An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations)』という題名の通り「富」の性質から著述を始める。「国民の年々の労働は，その国民が年々消費する生活の必需品と便益品のすべてを本来的に供給する源であって，この必需品と便益品は，つねに，労働の直接の生産物であるか，またはその生産物によって他の国民から購入したものである。」（[39]［Ⅰ］p. 10. 訳書［Ⅰ］p. 1）当時，イギリス社会で通念であった重商主義の「富は金〔貨幣〕である」であるとか，フランス社会の通念であった重農主義の「富は土地生産物〔農業生産物〕である」という定義とは異なり，「富は，労働生産物である」という文章から筆を起こす。つまり富の性質を労働生産物であると定義することから始めて，次にその

ような富を増進させる原因として分業の話にとりかかるのである。またワルラスは，貨幣について，一般均衡状況を市場において完全に確定するものとして価値尺度財を要請し貨幣の存在証明をおこなったのである。（[48] p. 164. 訳書 p. 164 及び pp. 154–155 訳書 p. 169）その後，「いま当面している問題は，市場における理論的数学的な解法から，市場における実際的解法に移ることである。」（[48] p. 309. 訳書 p. 333）として歴史的事実としての貨幣の分析にとりかかるのである。

(66)　ハロッド（R. Harrod）は，ケインズ（J. Keynes）の『貨幣論』において強調すべき点のひとつとして次のように述べた。「この命題は確かに，投資〔純投資〕が，つねに，そして，かならず貯蓄に等しくならねばならないことを述べている。これは，深遠な発見ではなく自明の理である。しかし，それは，銀行政策の効果に関する錯雑した議論のなかで，とかく見失われがちな自明の理なのである。自明の理が，むしろ，誤謬の進展を阻止するために，つねに，はっきりと述べられねばならないのが経済学の特徴である。」（[12] p. 67. 訳書 p. 68）

(67)　矢根によれば，フリードマンは「企業家が限界費用という言葉を知らないとしても，樹木が最大化問題の解法を知らないのと同じであり，『あたかも知っているように』仮定して導出された予測力の正確さこそが科学としての理論の妥当性を決定するのである。」と考えている。（[18] p. 77）フリードマンは次のように述べる。「すなわち，広範な条件のもとで，個別企業はあたかもかれらが予想収益（一般に誤って“利潤”とよばれてはいるが）を合理的に最大化することを追究し，かつまたその企てに成功するために必要なデータを熟知しているかのように行動する。つまり，あたかも企業は適切な関連をもつ費用および需要関数を知っており，かれらにできるあらゆる行為から生ずる限界費用と限界収入とを計算して，各行為を，それに適切な限界費用と限界収入とがひとしくなる点まで押し進めるかのように行動する，という仮説である。」（[7] pp. 21–22. 訳書 p. 22）

(68)　このことを特に強調する経済学者はフリードマンである。すなわち「そのような理論は，その“仮定”を“現実”と直接に比べてテストするということはできない。事実，それがなされうるような有意味な方法はない。完全な“現実主義”を達成することは明らかにできないから，したがって，ある理論が“じゅうぶんに”現実的かどうかという問題は，当面の目的にとってじゅうぶんに良好な予測をその理論がもたらすかどうか，あるいは択一的な理論による予測以上にすぐれた予測をそれがもたらすかどうかを確かめて，はじめて解決されるのである。けれども，理論は，それがもたらす予測の正確さと独立に，その理論の仮定が現実的であるかどうかによってテストできるのだという信念がはびこっており，しかもそれが経済理論を非現実的であると非難する，多年にわたる多くの批判の源泉ともなっている。そのような批判は大体において見当ちがいであり，したがって，その批判に刺激されて試みられた経済理論の改良の企ては，ほとんど失敗してきた。」[6] p. 41. 訳書 pp. 42–43）

(69)　フリードマンは，経験的データを論理に乗せるときの心情を次のように吐露する。「したがってわれわれの分析は，記録された所得 —— これをわれわれは実際所得と名づける —— と，消費者がその行動を適応させる所得 —— これをわれわれは恒常所得と名づける —— とをはっきりと区別し，同様に実際消費と恒常消費とをはっきり区別するのである。恒常所得の概念をこのように一般的に述べるのはやさしいが，正確に定義するのは難しい。恒常所得は直接に観察することはできず，消費単位の行動から推測されなければならないのである。そしてこのことは恒常消費についても，またそれと恒常所得との関係についても同様である。」（[6] p. 221. 訳書 pp. 412–413）

(70)　ミーゼスに論理的に加工された「イデオロギー」についての興味深い叙述がある。「論理的思考と現実生活とは全く別個のものではない。論理は，人間が現実問題を克服するための唯一の手段である。論理的に矛盾することは，現実的にも矛盾する。（略）人間行為学と経済学の主たる目的は，論理の通った正しいイデオロギーをもって，通俗的な折衷主義の矛盾した教義に代えることにある。」（[23] p. 185. 訳書 pp. 208–209）但し，ミーゼスがイデオロギーとよんだものは次のような性格のものではあるが。「イデオロギーと言う概念は，世界観という概念よりも狭義である。イデオロギーと言うときは，人間行為と社会的協業のみを念頭に置き，形而上学・宗教的ドグマ・自然科学およびそれから導き出された科学技術を無視している。イデオロギーとは，個人の行動と社会的関係に関する教えの

総体をいう。世界観とイデオロギーは共に，あるがままの事物の存在に関する純粋に中立的かつ学問的な研究に課せられている限界を超えたものである。これらは科学的理論であるばかりでなく，当為，すなわち人間が現世的関心において目指すべき究極目的に関する教義でもある。」（[23] p. 178. 訳書 p. 202）しかしながらミーゼスがいくら注意深く述べても，「イデオロギー」は形而上概念である。

（71） フリードマンの次のような章句は，このような経緯を如実に物語っている。「『恒常所得』および『恒常消費』と名づけられる量は，理論的分析においてはこのように非常に決定的な役割を演ずるのであるが，個々の消費単位について直接に観測することのできないものである。（略）理論的概念は事前的な量であり，これに対して経験的データは事後的なものである。しかも，経験的データを解釈するのに理論的分析を用いるためには，理論的概念と観測された量との間に対応がつけられなければならない。この対応をつけるための最も直接的なそして同じような場合に一般に用いられる方法は，各々の消費単位について別々に，収入および支出の原資料からその明らかな欠陥を修正して恒常所得および恒常消費の推定値をつくり，この修正された事後的な量が，求める事前的な量でもあるかのように考えることである。」（[6] p. 20. 訳書 p. 35）続けて，「しかしこのような修正をできるだけ行ったとしても，その結果得られる数値は，恒常所得および恒常消費の推定値と解釈されはするが，方程式（2.6）と適合したものではない。すなわち，実際所得に対する実際消費の割合は，実際所得の低い集団よりもそれの高い集団において相対的に小さいものとなり，このことは，それが i，w また u の差によると考えることができないと思われるような集団についてさえもいえるのである。そこでわれわれは，これまでの人たちがしたように，方程式（2.6）を却けるか，または，私がしようとするように，理論的概念と観測された量との間の対応をつけるためのもっと間接的な方法を用いるか，このいずれかの道をとらなければならない。（略）その中心的な考え方は，経験的データを，直接には観測できないと考えられる理論的概念が観測できる形に現われたものと解釈することにある。」（[6] pp. 21–22. 訳書 pp. 36–37）そして，「ところで，恒常成分を生涯の平均的な値と見なし，そして変動成分をこの一生の平均的な値と特定時期における実際の値との差と解釈したくなるかも知れない。しかし，次のような二つの理由から，このような解釈を認めることは重大な誤りであろう。第一に，一消費単位の経験自体がもっと広範な仮説的母集団からの一つの標本にすぎないのであるから，変動成分がその消費単位の生涯を通じて平均的に 0 となると考えるべき理由は何もない。第二に，もっと重要なことは『恒常的』という言葉に与えるべき正確な意味を前もって定めておくことは，必要であるともまた望ましいとも思えないということである。恒常的と変動的との区別は，実際の行動を解釈するために試みられたものである。われわれは，消費単位が，自分の所得および自分の消費がこのような二つの成分の和であると考えているかのように，そして恒常成分の間の関係がわれわれの理論的分析の示唆しているものであるかのように考えようとしているのである。恒常成分と変動成分とを正確に区別する線は，消費者行動に対応すると考えられさえすればどのようにでも，データそのものから決定するのが最もよいのである。」（[6] p. 23. 訳書 pp. 40–41）フリードマンのこの引用文の最後の章句は，粗雑な表現である。特に「データそのものから決定する」と表現は客観性を漂わせているが，データを論理概念に対応させる規則は，「経験の世界」自身にもないしましてや「論理の世界」自身にもない。それは外部の「意義の世界」からの指令に基づく。フリードマンの「消費者行動に対応すると考えられさえすれば」という章句がこれである。

引用文献

［1］ Ayer, Alfred, *Language, Truth and Logic,* 2nd, Victor Gollangz Ltd., 1946　吉田夏彦訳『言語・真理・論理』岩波書店，1955 年

［2］ Bell, E. T., *Men of Mathematics,* Whitefrairs Press, 1937（Pengiuin Books 2 volumes 1953）田中　勇・銀林　浩訳『数学をつくった人びと』（［上］［下］1976 年）東京図書

［3］ Bunge, Mario, *Causality* —— *the place oh the causal principle in modern science,* The World Publishing Company, 1963　黒崎　宏訳『因果性 —— 因果原理の近代科学における位置 ——』岩波

書店，1972 年
［4］ Chihara, Charles, “A Gödelian Thesis Regarding Mathematical Objects: Do They Exist? And Can We Perceive Them,” *Philosophical Review,* 91 April 1982　黒川英徳訳「数学的諸対象に関するゲーデルのテーゼ」（飯田　隆編『リーディングス 数学の哲学 ゲーデル以後』勁草書房，1995 年）
［5］ Debreu, Gerard, *Theory of Value ── An axiomatic analysis of economic equilibrium ──,* Yale UP., 1959　丸山　徹訳『価値の理論 ── 経済均衡の公理的分析 ──』東洋経済新報社，昭和 52 年
［6］ Friedman, Milton, *A Theory of The Consumption Function,* Princeton UP., 1957　宮川公男・今井賢一共訳『消費の経済理論』巌松堂，昭和 36 年
［7］ Friedman, Milton, *Essays in Positive Economics,* Chicago UP., 1953　佐藤隆三・長谷川啓之訳『実証的経済学の方法と展開』富士書房，昭和 52 年
［8］ Gödel, Kurt, “What is Cantor’s Continuum Problem?” in Paul Benacerraf & Hilary Putnam (eds.), *Philosophy of mathematics: Selected Readings,* 2nd, Cambridge UP., 1983　岡本賢吾訳「カントールの連続体問題とは何か」（飯田　隆編『リーディングス 数学の哲学 ゲーデル以後』勁草書房，1995 年）
［9］ 浜田宏一「日本経済　遠にらみ③　パスカルの賭け」（『書斎の窓』No. 483，有斐閣，1999 年）
［10］ 浜田宏一「日本経済　遠にらみ④　調整インフレ論の可否」（『書斎の窓』No. 484，有斐閣，1999 年）
［11］ Hanson, Norwood, *Patterns of Discovery ── An Inquiry into the Conceptual Foundations of Science ──,* Cambridge UP., 1965　村上陽一郎訳『科学的発見のパターン』講談社，昭和 61 年
［12］ Harrod, Roy, *The Trade Cycle ── An Essay by R. F. Harrod,* The Clarendon Press, 1936　宮崎義一・浅野栄一訳『景気循環論』東洋経済新報社，昭和 52 年
［13］ ヒルベルト（David Hilbert）「公理的思考」静間良治訳（『世界の名著 66　現代の科学Ⅱ』中央公論社，昭和 45 年）
［14］ Heilbroner, Robert, and Milberg, William, *The Crisis of Vision in Modern Economics Thought,* Cambridge UP., 1995　工藤英明訳『現代経済学　ビジョンの危機』岩波書店，2003 年
［15］ 廣瀬　健『数学・基礎の基礎』海鳴社，1996 年
［16］ Hirshleifer, Jack, “The Expanding Domain of Economics,” (The *American Economic Review,* 75 No. 6, December 1985) pp. 53–68
［17］ 飯田　隆『言語哲学大全』（［Ⅰ］『論理と言語』1987 年　［Ⅱ］『意味と様相（上）』1989 年　［Ⅲ］『意味と様相（下）』1995 年　［IV］『真理と意味』2002 年）勁草書房
［18］ 角村正博編著『経済学の方法論と基礎概念』日本経済評論社，1990 年
［19］ カント（Immanuel Kant）『純粋理性批判』篠田英雄訳（［上］1961 年［中］1961 年［下］1962 年）岩波書店
［20］ マッハ（Ernst Mach）『マッハ力学　力学の批判的発展史』伏見　譲訳，大進堂，昭和 44 年
［21］ McCloskey, Deirdre, *The Rhetoric of Economics,* Wisconsin UP., 1985　長尾史郎訳『レトリカル・エコノミクス』ハーベスト社，1992 年
［22］ McCloskey, Deirdre, *The Vices of Economists ── The Virtues of the Bourgeoisies ──,* Amsterdam UP., 1996　赤羽隆夫訳『ノーベル賞経済学者の大罪』筑摩書房，2002 年
［23］ Mises, Ludwig von., *Human Action: A Treatise on Economics,* 3rd revised ed., Contemporary Books Inc., 1966　村田稔雄訳『ヒューマン・アクション』春秋社，1991 年
［24］ Mises, Ludwig von., *The Ultimate of Economic Science: An Essay on Method,* Sheed Andrews and McMeel Inc., 1978　村田稔雄訳『経済科学の根底』日本経済評論社，2002 年
［25］ Morris, Charles, “Foundations of the Theory of Signs,” (*Writings on the General Theory of Signs,* Mouton & Co., 1971) 内田種臣・小林昭世訳『記号理論の基礎』勁草書房，1988 年
［26］ Mulkay, Machael, *Science and the sociology of knowledge,* George Allen & Unwin Ltd., 1979 堀　喜望・林　由美子・森　匡史・向井　守・大野道邦共訳『科学と知識社会学』紀伊国屋書店，

1985 年
［27］ ニーチェ（Friedrich Nietzsche）『権力への意志 ── すべての価値の価値転換の試み ──』原　佑訳（ニーチェ全集　第 11・12 巻［上］［下］昭和 37 年　理想社）
［28］ ニーチェ（Friedrich Nietzsche）『善悪の彼岸　道徳の系譜』信太正三訳（ニーチェ全集　第 10 巻　理想社，昭和 42 年）
［29］ 仲本章夫『形式論理学入門』創風社，1987 年
［30］ 野矢茂樹『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』哲学書房，2002 年
［31］ 大庭　健『はじめての分析哲学』産業図書，平成 2 年
［32］ 大森荘蔵『物と心』東京大学出版会，1976 年
［33］ Pearson, Karl, *The Grammar of Science,*（Everyman's Library）J. M. Dent & Sons LTD., 1937 安藤次郎訳『科学の文法』（増訂第 2 版）私製版，1982 年
［34］ Quine, W. V. O., *Word and Object,* The M. I. T. Press, 1960　大出　晃・宮館　恵訳『ことばと対象』勁草書房，1984 年
［35］ Quine, W. V. O., *From a Logical Point of View: Logico-Philosophical Essays,* 2nd revised ed., Harvard UP., 1961　飯田　隆訳『論理的観点から ── 論理と哲学をめぐる九章』勁草書房，1992 年
［36］ Rawls, John, *A Theory of Justice,* Harvard UP., 1971　矢島鈞次・篠塚慎吾・渡部　茂訳『正義論』紀伊国屋書店，1979 年
［37］ Rorty, Richard, *Philosophy and Mirror of Nature,* Princeton UP., 1979　野家啓一監訳『哲学と自然の鏡』産業図書，平成 5 年
［38］ Russell, Bertrand, *My Philosophical Development,* George Allen & Unwin LTD., 1959　野田又夫訳『私の哲学の発展』みすず書房，1997 年
［39］ Smith, Adam, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations,*［Ⅰ］［Ⅱ］Oxford UP., 1976　大河内一男監訳『国富論』（［Ⅰ］［Ⅱ］［Ⅲ］1976 年）中央公論社
［40］ スピノザ（Baruch Spinoza）『エティカ』工藤喜作・斎藤　博訳（『世界の名著 25　スピノザ　ライプニッツ』中央公論社，昭和 44 年）
［41］ 竹田青嗣『はじめての現象学』海鳥社，1993 年
［42］ 千葉茂美・東　千尋・若山玄芳『論理学入門』学陽書房，1974 年
［43］ 内井惣七「事実と論理」（『新・岩波講座哲学 3　記号　論理　メタファー』岩波書店，1986 年）
［44］ 浦上博逵「概念体の構造（2）── 経済哲学のための構想 ──」（『城西大学大学院研究年報』第 19 号，城西大学，2003 年）
［45］ 浦上博逵「概念体の構造（4）── 経済哲学のための構想 ──」（『城西大学大学院研究年報』第 21 号，城西大学，2005 年）
［46］ 宇沢弘文『自動車の社会的費用』岩波書店，1974 年
［47］ ヴェーバー（Max Weber）『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』富永祐治・立野保男訳　折原　浩補訳，岩波書店，1998 年
［48］ Walras, Léon, *Éléments d'économie politique pure ou Thérie de la richesse sociale,* Librairie generale de droit et de jurisprudence, 1952　久武雅夫訳『純粋経済学要論』岩波書店，1983 年
［49］ ウィトゲンシュタイン（Ludwig Wittgenstein）末木剛博『ウィトゲンシュタイン　論理哲学論考の研究』（［Ⅰ］『解釈編』昭和 51 年［Ⅱ］『註釈編』昭和 52 年）公論社
［50］ ウィトゲンシュタイン（Ludwig Wittgenstein）『論理哲学論考』野矢茂樹訳，岩波書店，2003 年
［51］ *Wittgenstein's Lectures Cambridge, 1930–32,*（edited by D. Lee）Basil Blackwell, 1980　デズモンド・リー編　山田友幸・千葉　恵訳『ウィトゲンシュタインの講義［Ⅰ］』勁草書房，1996 年
［52］ ウィトゲンシュタイン（Ludwig Wittgenstein）黒崎　宏訳・解説『ウィトゲンシュタイン『哲学的探求』読解』産業図書，1997 年